

防火策圖解

地震劇風附録

全

洋学文庫

洋学文庫
文庫 8
C 170



安

東壑翁著

上下附錄
合三卷

圖解

浪豫防法圖說

錦川堂藏

展士月共
書海
相納
閩板
日
日
日

子田

子田
地
地
地

冊

加

安政丙辰新鐫

東壑翁著

上下附錄
合三卷

防火策圖解

附地震劇風津
浪豫防法圖說

鐫川堂藏

學問西校

防火策圖解序跋
一冊

新長子

東何山元

一私著述防火策圖解序跋

Handwritten text on a small slip of paper, likely a note or a fragment of a letter. The characters are in cursive script and are mostly illegible due to fading and the angle of the slip.

閩板不其原出亦不其原
學問而亦納一平志其其以
細海幸厚日亦德方其其子
辰十二月廿九

鑄新辰丙政安

東壑公翁

防火

附地震劇風

浪豫防法圖

學問而亦

防火策圖

東壑公翁

一私著述防法策圖

東何公完

一私著述防卷第圖解書月

世有國私何博求觀私序

跋言一書自出交方一各句於

而私德也跋一上開板以先候

支彩上

後州美岩町

序

青木赤布

市橋山信吉醫師

跋

小栗三和

辰三月廿八日

和年三月廿八日
廣能要人父
省時隱居
小田一貞

一冊

防火策圖解



防火策圖解叙



人之在世也。不能身究一藝。通一術。而敷德於當時。流澤於後世。徒務詞章記誦之業。謾夸博物多能之目。或惑浮屠異端之教。或唱西洋窮理之說。或錐末是競。或進仕是躁。或玩弄風月。或沉湎酒色。生而無益於國家。

防火策圖解 序

死而與螻蟻同朽。豈可謂之有志之士哉。小田東壑翁者。有志之士也。其為人端毅方正。忠信誠慤。夙抱經濟之志。而不致於詞章記誦之業。一且罷仕。退隱於醫。遠聲色。菲衣食。而專用力於實學。以富國利人之說。自任。凡自軍術兵法。以及器械製造機

智妙算。出人意表。醫業之暇。出其緒餘。以示諸人。人皆無不歎服。其自信之篤。筆之於書。以藏于家。是以著述頗多。頃將刻防火策圖解。示予曰。此吾二十年来。覃思研精而所得。防火之一術也。將播布之於世。而使人脫回祿之禍。請子為我序之。予爰而閱

之。其言詳確。其意深切。其製器通用也。新奇輕便。其於防火之說也。可謂古今未曾有之書。歟。蓋太平之世。人無兵革之警。上無劫掠之患。安閭里而可以住焉。構堂榭而可以居焉。人烟如雲。錢貨輻湊。膏粱滋味。於是乎可以飽。華衣綺裳。於是乎可以服。寶

貨可以藏。錢穀可以蓄。而其平常不可高枕席而安。起卧者。其唯火災也。已。寒冬以警。風烈以懼。報火而鐘聲響。呼火而柝聲傳。官吏出。街卒馳。其初起自燭炬。而其終也。至燎原。煽々。燎々。焦天炙地。如流星之飛空。如萬弩之衝陣。中燄者傷。迷烟者斃。假令

雨師驅雨。陽侯激浪。遂不可以撲滅之。而况於人力乎。閭里市鄣。於是乎變而為墟。堂宇臺榭。於是乎化而為灰。寶貨焚滅。錢穀燒亡。當是時。捐資失產。顛沛流離者。不知其幾。太平之世。使國力疲弊者。火災為最大。是以官置消火之員。衙設消火之卒。龍以

吐水。扇以回風。所以防之之方。亦可謂備矣。而遂不可以防之。延燒連燬。小則數百家。大則數千戶。雖防火之神鎮火之符。亦無柰之何。其竟也。謂之天災。劫火而後止。可歎矣夫。嗚呼。火誠不可防邪。若誠不可防。則國疲財窮矣。翁之著此書。將防其不可防

附錄
者。而攘其災。救其窮也。初聞之。其言
奇而可疑。後察之。其事微而可信。夫
鎮火之水。防火之慎。翁皆得之乎。尋
常耳目之所觸。而窮其理。而贊其用。
其才踰西洋窮理者之上。而闡先賢
未發之秘者歟。其有功德于世也。亦
大矣。蓋以其平生學主實用。而不務

浮華。富國利人之心。出於忠厚至誠
而弗已。故歟。其於附錄。亦復如此。如
此而後生。則有益於國家。死則不與
螻蟻同朽。施之乎實地。而其功愈著。
則防火之神。亦將以有。遜其德歟。身
生於聖。沒千載之後。而能創此一大
偉事。孟軻有言。曰。豪傑之士。不待文

王而興。予今為翁請揭此語。安政丙辰冬十月柳浦居士青木槃叙

防火策圖解

東壑翁 著

允太平の世オウタイヘイに當てマタ國家の財力をサイリキヲ疲ツカラし士民の盛衰セイサイを拘カウむるものも火災カサイの變ヘンより大オホクあるはかハカく殊ト小チホ又何時トキ發ツクするやも測ハカり知シル危ヤブくは極キマて火急カキウある時トキも其身ミも危ヤブく逃ニゲる小途チナを失ウシふ事コトあり至シ貴キの所オシ方カタも下賤ゲセンの類ルイに小至チると是コトを恐オソむる人ヒトある危ヤブくむや別バツして烈風レツフウの如ニく一刻半刻イッコウハニコクの間アタも安心アシンある可ベカら

然シカふ又愚アホカある人ヲも危アヤシき小安居アキキして何ナニの用意ヨウイも
あきアキに終マツふ不慮フリコの火災カ小大損毛カインシモウして後世トイの手段シユ
クク風フウも果ツキ十方バツトウころキ氣病キヤミとありて百年ヒヤクネンの壽スベキを一イツ
舉キヨ小滅シツする人ヲ留マるマ是コトあり哀アハれル又マタ歎ナゲくハしキ次第シブ
あり困ヨツて備出ツク火の根元ネゲンを考カウるルにニ初發シヨホツも僅ワツり
ある消炭ケシズミの残火ザンカ炭壺スミツボの中ナカ小起オコり返カエり或アヒも床下トシタ小
入イるル灰桶ハイオケのぬくヌクりリ或アヒも物モノを二階ニカイ若ニシ小燈トシビ火
を忘ワスるル烟ケ若ニセルの吹売フキガラ或アヒも小童コドモの熱アツき花火ハナビの類タビ

又オホ大部屋ベヤ臺所ダイトコロ普請フシヨ小屋ヤ或アヒハ貧フツし者モノどもの寒サム
夜ヤを凌シぐ為タメ小抱イダくトコロ火桶ヒオケ或アヒも火燧カシの埋火カシビ又
小挑灯チウチンをとト不フなりラ枕元マクラモト小籠コノへチ床忘トラスるル蠟燭ロウソクも
燃移ヒキり或アヒも焚火タキビをカんゼぬキ見童コドモ小折ウチマカれセ包フキ或
も熟醉ジユクシして火ヒを焚タキあぐら居眠イネムりして相發アヒツクりて或アヒも
蚊遣カヤリを焚タキあぐら居眠イネムりして發ツクるルの類タビ皆タビ是コト孤獨コドクの
貧者ヒシヤ一時イチジの過止事アチチヤムコトを得エるルより發ツク火ヒ該カハ小大車ダイシハ
小事シヨウジより起オコりテ火災カも小家シヤカより發ツク火ヒ宜イハるル於オ往古ワウコ

大火災の模様を察する小元來火災も多しオホ平常ヘイジョウ
火の元用心手薄の色隅孤獨極貧ヘンクワコドクゴクビシの小家シヤカおども
發ハツして折悪く烈風レツフウおども 御府内ゴフウチ小焼入シヤイ蔓延マンエン
して大災とある事コトありらば或も又市井シヨウの中ナカ小
火災の騷動ソウドウ小まぎれに盗ヌスみせんと巧タカく或ハ焼打ヤケウチ
金銀洞鐵諸鉄物を拾ヒキひおびとて常ツネ小火災のむむ
事コトを希ネガふ邪欲ジャヨク盗心トウシンの者モノもて烈風の夜ヨ小乗シヤウし放火ハツカ
して遂ツイに延焼エンシヤウし及ぶの類タビ是皆シヤウジ小事シヤウジより起オコりて大患オホガイ小

至イる殊ニ更東都シヤウトウも和漢無雙ワカンムソウの大都會オホトウイの地チありて
人家ジカス數百萬戸ヒヤクマンコ古コより火災カ多く明曆三年メイリキ本郷丸山ホンガウマシマ
より出火デし又同日ドウジツ小石川コイシカハ傳通院デンツウイン前マエより出火デし同
十九日カウジマチ鞠街マキエ五丁目イチヂムよりも發ハツし以上皆イナニ一系イチケイとある
江戸エド七分シチブの類焼ルイシヤウし焼死シヤウシの者拾万八千人シヤウマンハチマンニ及ぶ
と云イハふ又安永元年アズキ目黒行人坂メカクギウシカより出火デし千住チヌと焼
行ユキき火尖ヒサキ未イだ猶ナカざる内ウチも又小風コカゼ小変コカバり芝田町シヤダチヨウと
類焼ルイシヤウし是亦コトモ焼死シヤウシ人多オホクく又文化三年ブン化高輪タカハより出

火く浅草反圃と二里三拾町余焼拂ひし由是昔
 の大火災を今に於て世上に傳聞する事よし
 市中の焼亡怪象人そ敷を初るべし近頃
 を文政十二丑年三月廿一日外神田佐久間街より
 出火し築北の先海手と焼拂ひその後天保五年二
 月七日又同街より出火し鉄炮洲海手と類焼し同十
 日丸の内より出火芝口と海手と焼拂ひ又弘化二年
 正月廿四日青山權田原も出火高繩海手と焼拂ひ

翌千午年正月十五日日本郷丸山も出火鉄炮洲と類焼し嘉
 永三戌年二月五日麹街四丁目も出火芝金板海手迄焼
 拂ふ是等の出火も火災の火あるものよりそ外五街十町
 二十町位類焼の小火災も年々四五度づき多くを後
 永承三戌年中西の窪日本橋四日市安針街等丸
 一年の内所々の火災をりつむ時と小災も亦大災
 とあり尤永承五子年正月四日米澤街出火の甚さ
 のと烈風も云々快晴の時長思の外延焼せし

火々元々倣列して 御嚴重に 作出嚴重夜

番見廻り方 作付

御威光を以て 皇後大火 市中一統相助も偏

御仁政改と難有安堵仕 嘉永七寅年十

一月十五日 聖天街三又も出火 猿若街南小馬道も

花川戸を焼拂 又同年十二月廿八日 神田須田

町も出火意外の大火災 日本橋江戸橋を限

敷焼 又安政二卯年二月二日の夜 丑刻小細街一

丁目も出火 南風烈々 浅草茅街を延焼せしむ

出火の時 市中焼亡する 金銀米穀絹布器財

諸材木の類 本邦諸國の産物も言ふ及ばず 漢

土和蘭船来高價の織物貴薬を 外日用の諸品小

至ると 茶百万金の器財山の如く 小阜の如く小

聚く 悉く是を火小扱いて 灰燼とあり 去りの

米穀器財共小忽ち高價小進 諸職人の手留料

三倍五倍小至り 諸人の絶望 絶く自然上下

耗の基實モト小歎息タタ不堪タラ列侯の富トミと推錢穀器財オシ
 の焼亡ヤクも差置サシ第一金銀ダイも求めモト難ガタき累世持傳ルイ
 ちよの武ブ器重宝キ記録書類キを焼失ヤクし珍木奇材チ万
 金を抛ナて修理シしめし殿宇樓榭テンも一瞬の間トキ小
 灰燼ハイとある惜オシむべきに於オて領内大小の百姓ミン
 平生の恩澤オン小酬ウタふ再造經營サイの力を助け奉らむ
 家産を傾カき用金を出イて上下の辛苦疲弊シ亦幾
 多タや況シてや市井商估シの輩トモ小至キても三年小一度

五年一度此大厄イ小遇ア小或シも焼亡の後ノチ也小普請
 經營ケイ以テと維キそ人々の運勢ウン小よシ不幸フなりて亦再
 燒ヤクるが如ニきを抛入ナ骨折ホ千辛万苦セン一ト漸ヤく再造
 の功コウを遂トへに未レど暫時トキも住居ヂウせざる中ノ小火コ小救
 せん事を歎ナき強クく是レを防コふべきをレとレをレ猛マウ
 火カの為ニ小身ミを燒ヤれ焦損セウ火傷カもレのレ少シかレば
 此故ニ小烈風レツ大火の時トキ小當アてると唯恐タラしき幸コト小のこ
 心得ココロ救万の人ス周章シウ狼狽ロウして火を防コぐの術テ也

かく徒小家財を運ハユび進ニテるを専ロシと以コト是コト小於オイ火ハ
 勢チカラを愈イキ熾シふを火ヒ夫ツキハ軒キ端バより軒ノキ端バつツを
 屋根裏ヤチウラより屋根裏ヤチウラに燃ヒ去ハシる小間戸コマドより小間戸コマドに
 吹通フキトヲし床下ユカシタより床下ユカシタつツ小蔓延コシエシし此コト小あオモるコト思オモへど
 彼カシユ亦モエ燃カ上カも忽タチち二町三町の遠トラさ小燃ヒ去ハシる大小の
 火屑ヒクダハ烈風レツフウに随シタツて散サン乱ランし大道堀川ダイダクホリカハ大土手オホドテと打ウチ裁コ
 し思オモひしコトらるコト処トに飛トビ火ヒし燃ヒ上カるコトを混雜コシガツし因ユツて
 尚ナラ更サ向サりテ焚ヤ火ビをシ傳ノ小拾ステをフイて進ニテるコトより燒ヤキ出シる

もあスミる炭火埋火ビカミヒある火跡ヒバチを土藏ドゾウ小入イて内ウチより燃ヒ出シ
 次ツギもスミる火ヒ上カ小火コヒを添ソエ火口ヒガチを倒ビれテ救シユ十行ジウカウ小あスミる火勢ヒセ
 蓋フタをスミる千令チンレイの家藏イセクラ万令マンレイの諸商物シヨウアキモノを懸イテち一時イチジ小
 燒滅シヤクしテ炭灰タンカイとあるコトをよク出シるコト亦モ盗ヌスむ
 病者ヤシヤ盲人モウジン苦ク行コウる者モノハ介カイ
 抱ア手テ廻マり兼カ家具カグ商物シヤウモノをシ出シる暇イダヒもナく周章アハテ騒ソウ
 土藏ドゾウの目塗穴藏メヌリアナザウの蓋フタもナ半カチもナ叶イてイ令レイ限カキり小進コシ
 出イる類燒イカの後ノチ小至コチるコト主ヌシのコトにカるコトもナ且ナ又ナ飛トビ火ヒし

行先ユクサキは小火尖燃出ヒリキエイダ煙エニキを閉トデらるる倒タるも何ナニも老
 人女子小兒シヤウニの輩トモガラを逃ニゲる途トチウ中ナカに踏倒フミタされ怪ケガれ
 も多く元イニシを周章シウシヤウ混乱コンニ救スクふ暇イトマなく見ミる小忍シヤウび
 古イニシより大面ダイメンの主人シヤウジンも火災イツキの一擧イツキ小株コケ碌基ロクキ手テと失ウツ
 小元コゲン引先ヒキサキ令融オウシツカ差サよ一年未イチネンミ手馴テナたる仕来シキりの俗世トクセ
 も終オハり兼妻子ケンシを牽ヒキて路頭ロトウ小流コウ落ラクるも何ナニも有為ウヰ
 轉變テニヘンの世セの中ナカと云イヒあぐら火災イツキの一大変イチダイヘンより上
 下の困厄コンガク小及コキツや斯カの如カく殊コト小諸物コショブツ焼亡ヤクウ諸小拚ショコヘン

底ソコある小より市中シヤウチウ彼是カレコトせも揚アゲる諸物ショブツの候職人コトシヤの手間テマ
 自然シヤゼン小高貴カウキ小進シンる第一材木ダイイチサイキの類ルイも近頃チカゴ高山コウサン深谷シヤンコ持
 出イダすの成程ナリタも手テ段ダン工夫クフを考カウへ悉コトく代木ダイキも放ハつ
 追オヒる良材リヤウサイの乏トホくあても愈高價イユウカウカ小募ツクる斗バカりも此上ココノカミも
 止ヤム事コトを得エば一年イチネンく大火災ダイカサイあつた上下ウヘノカの瘡ヒ契料ケイリョウり知シ
 ぐは是コノ小加カる小飢饉キキン水旱スイカンの災サイを以モシテ其ソノ患ウレヒ亦イ小
 何ナニをや實シヤク小火災コホサイの一大変イチダイヘンの國家コクカの財力サイリキと瘡ツカら士
 民タチの盛衰セイサイ小か上下ウヘノカ衰耗サイコウの基キとあるアルぐ其ソノ故コト

防火の綱領トモ講究準備せむんハるべし古
 昔戦争の世弓矢を以て戦ふ時ハ楯を以て是を
 防ぐその後炮銃海来ハ戦法烈シク有る時ハ又工夫
 新小竹把を製作シて是を防ぐ既小利根川の如
 きも坂東第一の大河ナリて不時小洪水の恐あるガ
 故小頑ト免廣大の堤塘を築シ其水溢を防ぐ今
 火災を防ぐも頑トモ其器具を準備する小ゆるぎれば
 是を能く防ゆる事叶ハ危シクハ然る小尚今防具

を用心びて防ぐる欲するも楯竹把無シて弓銃
 を防ぐるも小等しく如何シテ能防共バらんや今世
 上専ら龍吐水を以て第一の防具ト有りと雖大風猛
 烈の火尖も亦水人力の能及ぶべき事小非ハ近來
 有心の士既防火の綱を説者あるも用費多ク
 且迂遠ナリて實地小功用ナリ殊小近頃ハ町並
 家毎小用心水を汲み置餘多龍吐水を備ヘ晝夜の
 番嚴重ナリ時節ナリてまじく出火ハてさの風も劇シ

のゝがる小思の外蔓延して大火災とある事あるハ暫
 時も安心あるべし火害小烈風猛火の蔓延してハ
 中以水龍吐水人力の及ぶべしなる事必せざるハ
 天地の妙用自然なりて万物を生むるあるが必火
 相尅するの物ありと云べしハ譬へハ王水硝酸硫酸
 塩酸等の金銀銅鐵を溶解するも火勢をのゝぐべし
 水のぬくもあらず猶熱湯の氷雪を消するが如く又石
 鹼の脂垢を除き灰汁の臘脂を尅し梅酢の臘脂

色を生括せし免礬石の蘇枋色を美括せしめ生
 姜汁の血を消するの類を妙効奉人弄る小暇あり
 又水中小投して汚濁する物あり火中も投して焼
 燃せざる物あり予爰小於て救十年の間防火の一
 術を工夫し晝夜千慮萬考して例る赤永三庚戌
 の歳小至り防火の術小於て至易至若なりて月
 費少く事の急小臨て速小應むるの一策と發明せむ
 其術なるや第一軒端屋根裏小間戸床下等小吹

入^{イル}季^{トヨ}の猛^{モウ}烈^{リョウ}の火^ヒ火^{サキ}を勿^モ論^{ロン}微^ビ少^{シヤウ}の烟^{エン}炎^{エン}も吹^フ入^{イル}ざる
 様^{サマ}防^{ボウ}具^グを以^モて遮^{シヤク}隔^{カク}し且^ナ又^{マタ}初^{シヨウ}祭^{サヒ}屋^{ウチ}上^{ウヘ}に燃^ヒ上^{アガ}らんと
 する火^ヒも立^{タチ}処^{トコロ}に折^{ウチ}消^ケし一^{イチ}家^カに傳^{デン}燒^{シヤウ}するも忽^{トク}に防^{ボウ}止^シ
 し一^{イチ}町^{チヨウ}二^ニ町^{チヨウ}に延^{エン}燒^{シヤウ}するも急^{キウ}に遮^{シヤク}り止^{トメ}て猶^{ナウ}滅^{メツ}せし
 むそ劇^{ゲキ}風^{フウ}猛^{モウ}火^カに向^{ムカ}ひて防^{ボウ}を止^{トメ}る半^ナ自^ジ在^{ザイ}あるが故^ユに
 如何^{イカ}ある烈^{リョウ}風^{フウ}の時^{トキ}と雖^モ大^{ダイ}火^カ延^{エン}燒^{シヤウ}の患^{ウレ}あり且^ナ予^ヨが
 工夫^{クフ}の防^{ボウ}具^グを用^{ヨウ}ゆる時^{トキ}も町^{チヨウ}並^{ナミ}間^マ口^コ五^ゴ間^マ十^{ジュウ}間^マ或^ニハ二^ニ十^{ジュウ}間^マ
 三十^{サンジュウ}間^マに及^キぶまも人^{ヒト}足^{タリ}五^ゴ人^ニより十^{ジュウ}人^ニに及^キぶ手^テ廻^マり素^ソ人^トに

てもそ働^{ハシラ}き自^ジ在^{ザイ}し如何^{イカ}ある烈^{リョウ}風^{フウ}猛^{モウ}火^カと雖^モ聊^{リョウ}も
 空^{カラ}相^{シヤウ}遠^{エン}遮^{シヤク}隔^{カク}猶^{ナウ}滅^{メツ}するが故^ユに諸^{シヨ}人^ニ周^{シウ}章^{シヤウ}狼^{ロウ}狽^{タイ}家具^{カガ}
 を持^モ運^{ウン}が逃^{ニガ}るの驛^{ヤキ}もかく各^{カク}安^{ヤス}心^{シン}して防^{ボウ}ぐべし
 縦^{タテ}令^ヒ如何^{イカ}ある近^{キン}火^カ急^{キウ}火^カと雖^モ人^ニの心^{シン}中^{チュウ}におどやうある
 り故^ユに前^{ゼン}後^ゴ混^{コン}乱^{ラン}の患^{ウレ}あり此^{コノ}形^{ガタ}行^{ユク}ふに至^シて東^{トウ}都^ト
 名^ナ勿^モ論^{ロン}京^{キョウ}都^ト大^{ダイ}坂^カ五^ゴ海^{カイ}に及^キぶ諸^{シヨ}國^{コク}捕^ポり人^ニ家^カ
 叢^{ソウ}集^{シツ}の地^チに火^ヒ延^{エン}燒^{シヤウ}の患^{ウレ}あり小^コ至^シるに及^キぶ
 時^{トキ}に弟^{テイ}宅^{タク}回^{クワ}禄^{ロク}の福^{フク}を脱^{ダツ}き錢^{ゼン}穀^{コク}燒^{シヤウ}亡^{マウ}の患^{ウレ}あり万^{マン}貨^カ

流布一物價平坦一國富民饒小上下安堵一
 て太平の衢小鼓腹を一一元世小國益と唱ふる
 一の此防火の一術小勝るものあり居るに
 世の中一の都會の地小火災あり時ハ家職カシヤカシカ暇
 あり一金融宜し一に世上一景氣ありと心
 得遠も輩もみよむ是皆
 御恩澤の有難さ半を歩む者どもものり諸あり
 何とあるハ消火御備あり人救あり馬の各各下小を歩物

入少くは且又延焼の節ハ普フシ不夥一市中の橋
 々斗りてもそ歩物入容易ありは為るハ市中困窮の
 類焼人餓死も可及の難法の者よ毎交
 御救小屋並に為建救日之間歩扶助ゴフゴフ並に又飢饉
 の節も市中一同 御救米並に下並ル
 御仁政のを繼ぎ事をもち忘る己まくが職の
 暇あるを厭イヤ小
 御上様の御慈悲と諸人の難儀を思ひよるに却り

火災の多きを欲する者、寧ろ奸商邪工の徒あるに如
 身自ら火を放ち盗をかきまじもそ悪意欲情小慕
 るる一あり感應經曰夫心起於惡惡雖未為而凶神
 已隨之人皆惡之刑禍隨之吉慶避之惡星災之と
 是唯そ惡念の心中小萌る斗ふ未ど惡事の為
 ざれども惡星の崇凶神の咎初の如く垂あるをとり
 恐ざるべからず且又火災多き時も諸職の作料倍増小
 至し一旦の利潤ある様小尼由もどもそ火災の為小諸品

高直あるも年増して又已ましく小買入るるあり
 於て却て損毛多ければ則ち何の益も有らんや
 諺小已より出る者も又必已小帰ると云そ世上諸人の
 雜儀を好む者も亦めづりて必已が方ののまりと
 ある人の雜儀を悦の報小恐るべし古語利人者
 天必福之惡人者天必禍之と云そ他の雜儀を以て
 已まら利徳とをも悦ぶ者も譬へハ毒を食して
 腹を肥くが如し一旦の腹小充まどもやがくそ方を失ふ

べー天地神佛も是を免くことなれども詭計の潜小
火附盗賊人殺する者のそ眾忽ち取きて目前火刑
死刑小處せしむるを以て其理を考へ初るべし將又
毎歲燒亡せしむるの數百千万令の諸事悉く國土
小存在して通用する時ハ其益の廣大なる半如何
斗りて巾紙令諸職の作料下せしむる亦已が日用
買入の形々下せしむるハ平日の嘗て万々於て却て
利徳多し是亦人を利するものハ天必以是小福とするの

道理之凡萬種流布し錢穀餘りありて國疲民窮
するの理ありんや諸品の價下落する時ハ四海一統
下落の候も相互小甲乙なく循環するも天地自
然の理あり故に防火の一術を實小國家を富し
上下士民を饒足せしむるの第一ありもの也若是
を誅て火災を好むものなり
御治世の大罪人と云べし故に防火具を用意して各
能火災を防ぐ時ハ第一小自己の厄難を除き次小

諸人の類焼を脱しり

御上様の忠義 御國恩を報答の一端ありて
感應經に心善を起せども未だ善事をかきと難
吉神已之小随小天道之を祐多福祿之小随小
衆邪之小遠さくも神靈之を衛らむと云も故今
其防具法術を圖解して遍く是を世に弘め人小
示して太平防災の用小備むと欲久且又去年
安政二年十月二日夜戌の下一刻 御府内の大地震も

古今罕有の大變りて江戸一帯と申中も深川本
所淺草下谷も別して猛劇りて堅固の土蔵も悉
く壁を搦り家宅長家町並一時小震潰れ此時
小當り諸人進出小暇もあらず梁小壓え柱小折れ
偶進出する者も戶外より落りたる處の庇小折れ雨
色かる處の土蔵の壁小折れ路次往來小徘徊り
左右より落りたる屋根庇小折れ死傷甚多の夥
是小徒小火を以て救百卷下の火口一齊小燃上

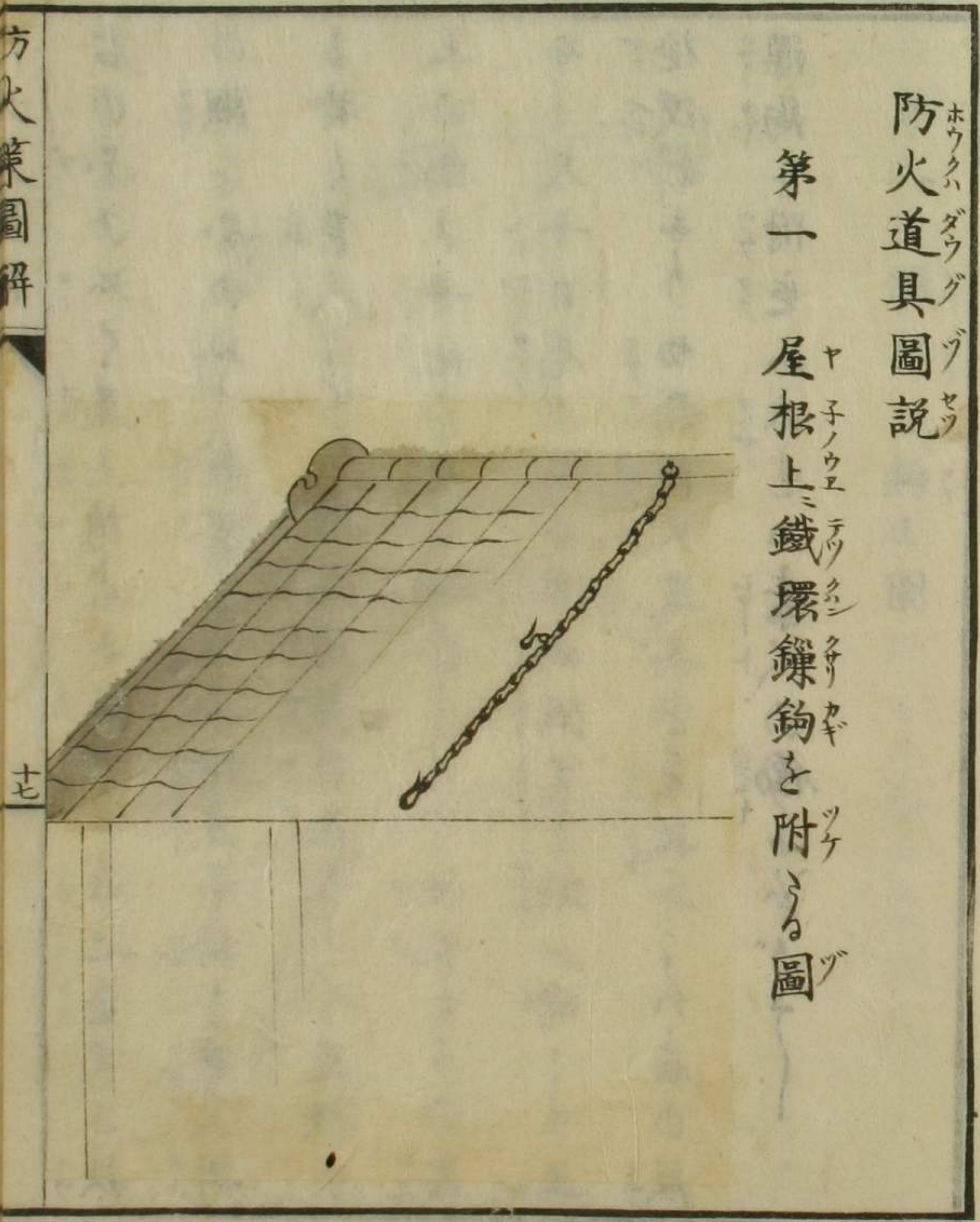
誰有て是を防ぐ者もなく其火勢天を焦く必く
 中し未だ死する小運よく屋根下より穿ちぬるものあり
 又逃る事叶はざりて其焼死するものあり或ハ父母兄
 弟を失ひ或ハ妻子を失ひ或ハ一家内主従た小
 死傷するものあり或ハ五十人六十人同時小死するものあり
 其死亡兼万ありや初る危くハ殊小土蔵も悉く破
 壊しる上小あり同時小大火とあり至火中小残るものあり
 土蔵なく未だ潰れざる家も押並に類焼し救万令の株

祿も暫時の間小烏有とあり運よく九死を免脱し
 者も寐巻つて逃る小俄小孤獨の窮民とあり寔小物
 恐く目もゆらぎぬる怖くは何が故ぞおそむ大地
 震ハ百年二百年の間も有りや無やよく最罕ある事
 あり其を防ぎ方を知る者なく年々唯火災の多し患と
 して家宅の建方を粗畧ある小よ其を近年も
 續き諸國小大地震あるをば其後とも東都小
 於て再變ありといふべし其兼て是を防ぐの心

得方エカタおんがなるべし予ハ元來地震を恐る事な
 しアコシ予を預め其防ぎ方を命ぜり故予が居宅イタクも
 劇烈ケキシツの中も不思議フシギキ小脱コダツをうせ固く此度居宅の建タテ
 方土藏カタの造り方ツク如何イカなる地震チクも潰ツクれぬが
 事コトハ破壊ハエせぬ殊ト手輕テガレうて費用ヒヨウ少スチき一綱ヒシを撰セン
 いて防火策の後チ小附録フロク一諸人シヨジン示シいて兩大災
 を脱ガ免メむと欲ホシは是亦予が
 御恩ミコノチ小報コホウ奉ホウるの一端也イツタンシと云爾イラシカ

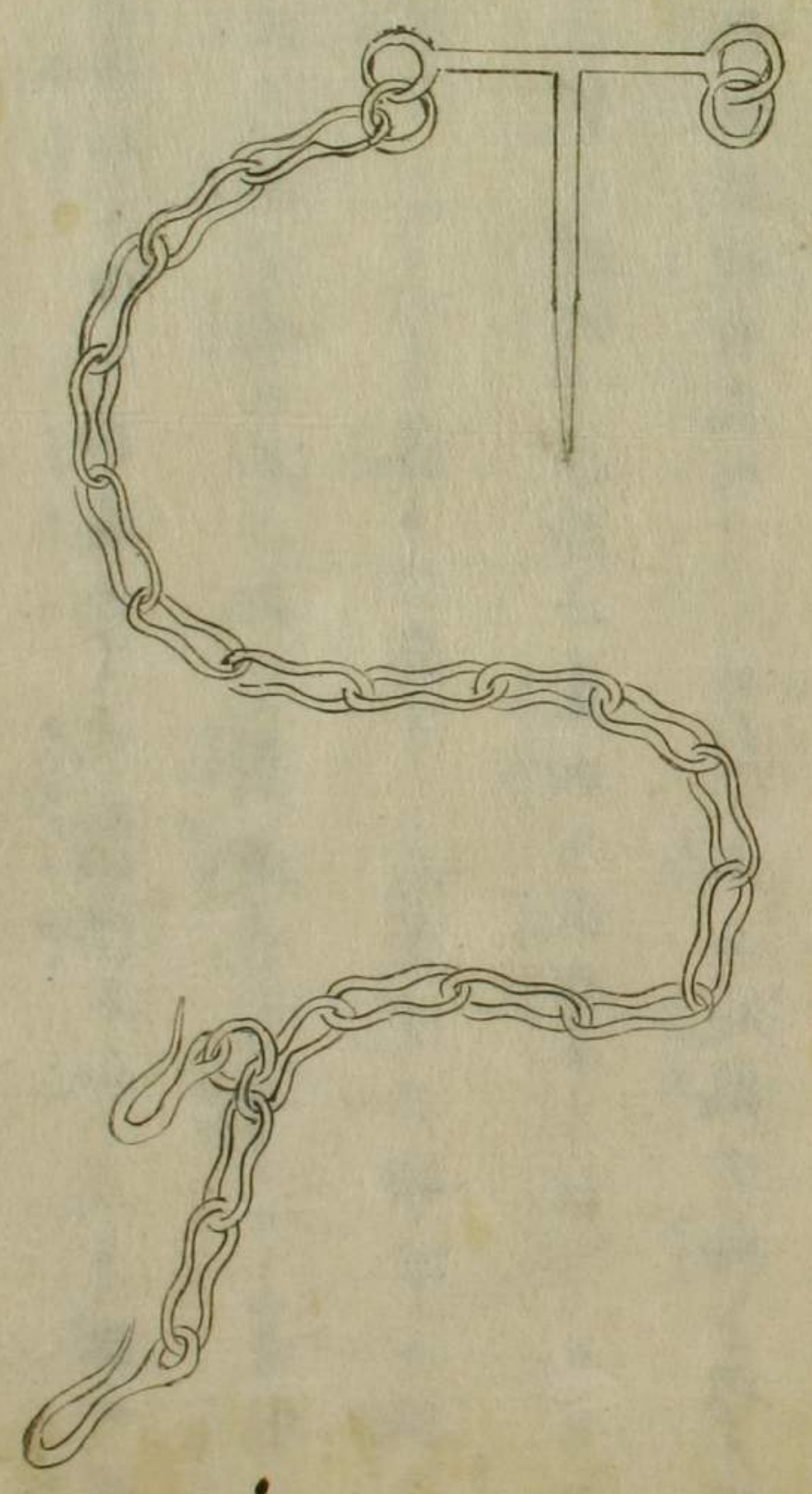
防火道具圖說

第一 屋根上鐵環鎌鉤を附る圖



右の^ツの^トの^オの^ク屋上棟木小鉄環を^オ打込^キ是^キ小鉄
 の^ク鏢^キを^オの^クの^ク表裏とも小附置^キを^オ鉤^キを^オ帶^キ小掛
 る^キ時^キも^オ素人^キも^オ進^キ退^キ周旋自在^キに^オ屋根の
 上の^ク働^キき^オ平地^キを^オ走^キる^キふ^キひ^キと^キく^キ怪^キ敵^キを^オの^ク患^キ
 あり又^オ平日^キ尾^キの^クく^キ多^キ雨^キ漏^キ害^キを^オ結^キ入^キ時^キも^オ至
 極^キ便利^キあり^キ勿^キ論^キ防火^キ道具^キを^オ取^キ扱^キふ^キの^ク右^キの^ク鉄
 環^キ鉤^キを^オ附^キ置^キふ^キ非^キず^キハ^キ素人^キの^ク働^キふ^キが^キ一^キ

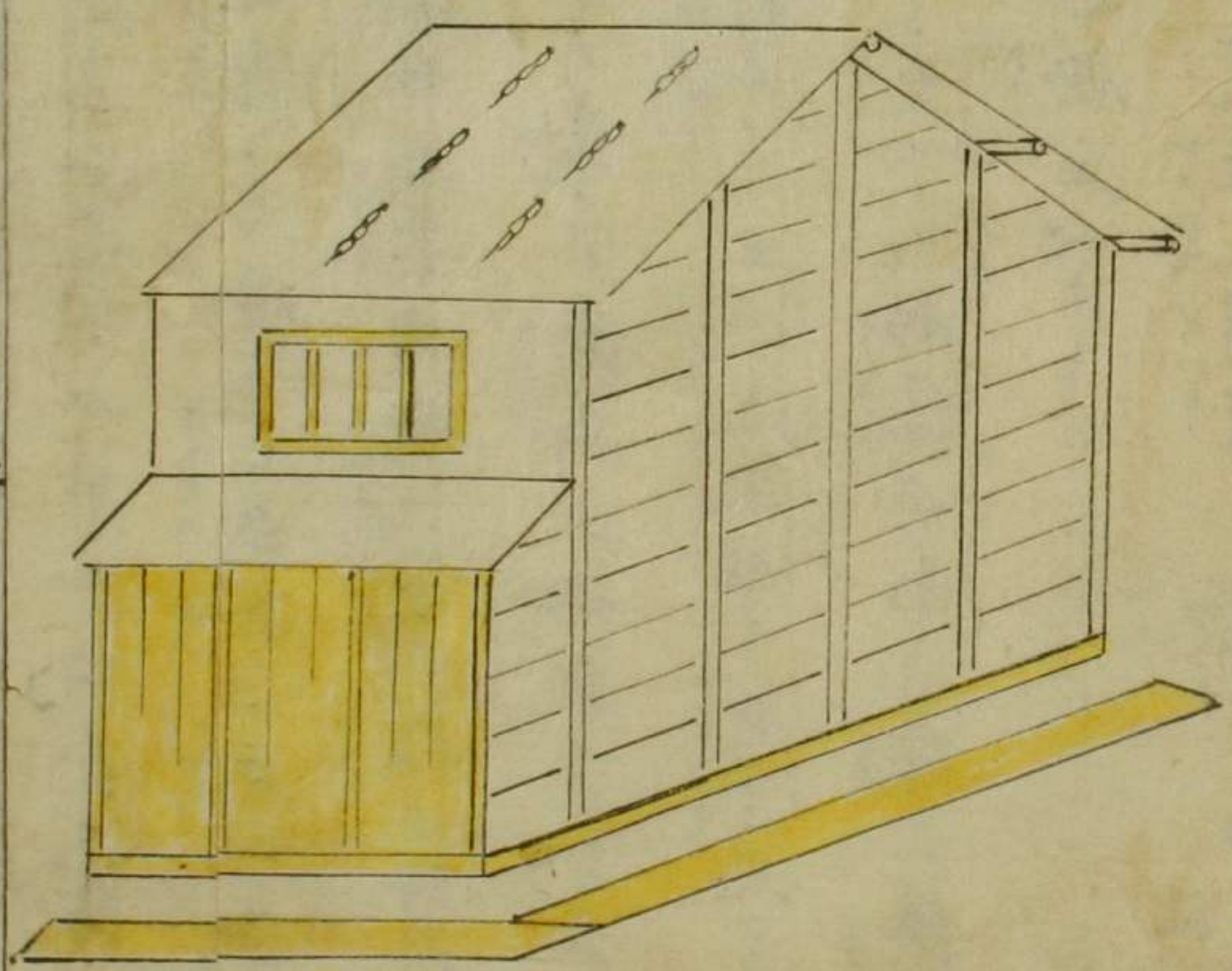
第二 鐵鏢并鉤の圖



右ハ第一号屋根の上の鐵鏢鉤の畧形之ヲ長短を屋
 根の廣狹小隨テ相違あり大凡四隅小届くべし此小製
 造ハ又角の形も畧の如く製造すれば帯小りけり動搖
 周旋もともづき落るの患あり尤製造の時帯小掛
 是を弋コゴ便利ベリより小葉回イタタも改作せしむべし又鏢
 の長短便利自在ありめむが為小短縮の鉤を作り帯
 より五六寸の葉小附標の長短適度小ありめ動容周
 旋ワラはも脱落せざる様子の如きコトの形小製作コトし

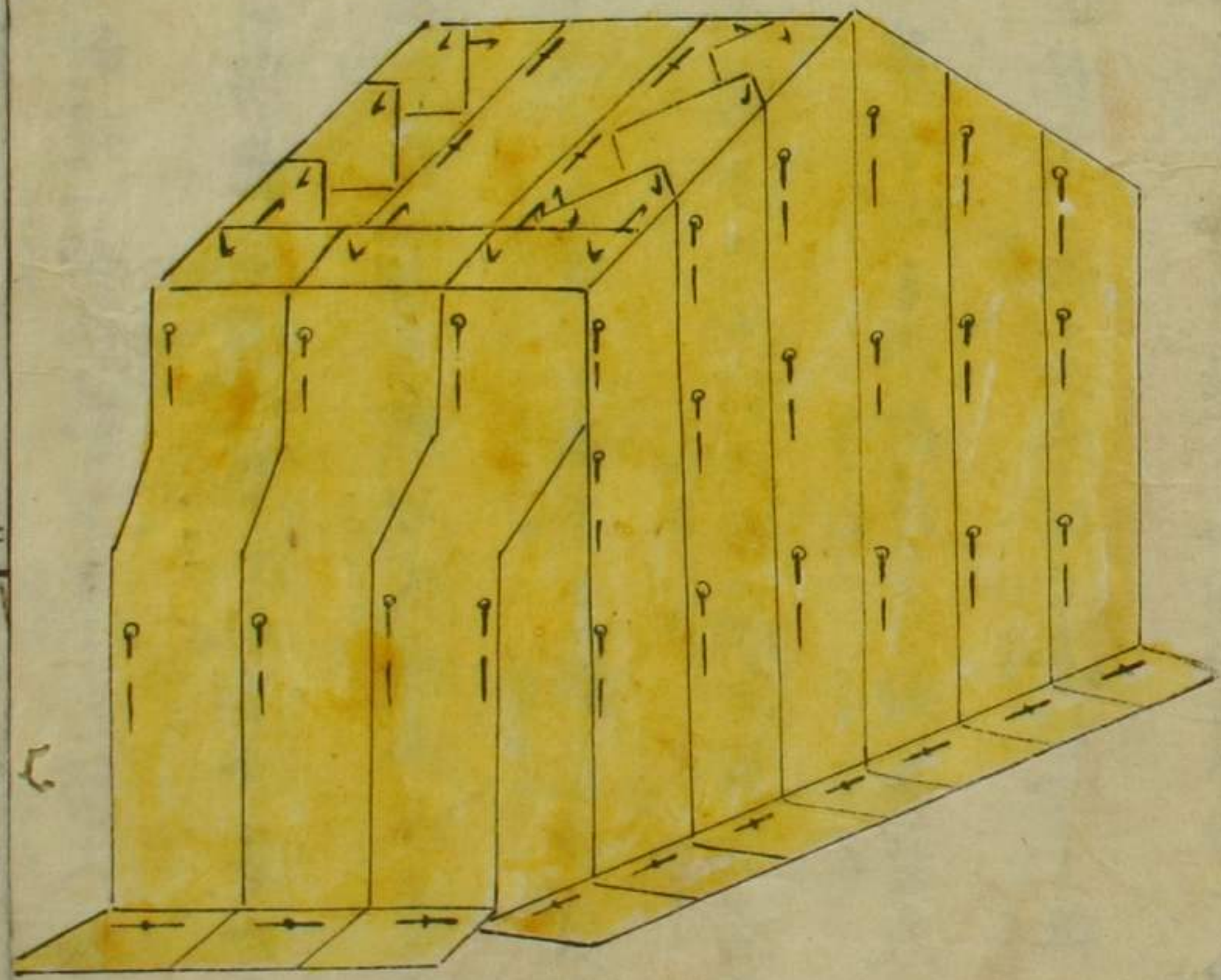
第三

柿葺一軒
 建の形



右を柿葺一軒建の屋上三尺間小茅十四束の防具
 為の器具を密く折附る等尤秩物の類ハ油石
 灰を以て敷回塗詰め雨水の漏入ざる様小
 又茅十六束の向あり為の器具を雨落の下に三
 尺間小堀込隙鉄針斗り土の上小出せ平日を板
 割を以て蓋を敷き雨落の向あり為の器具
 を以下皆同様是小堀込

第四 柿葺一軒建屋上周圍とも包る等

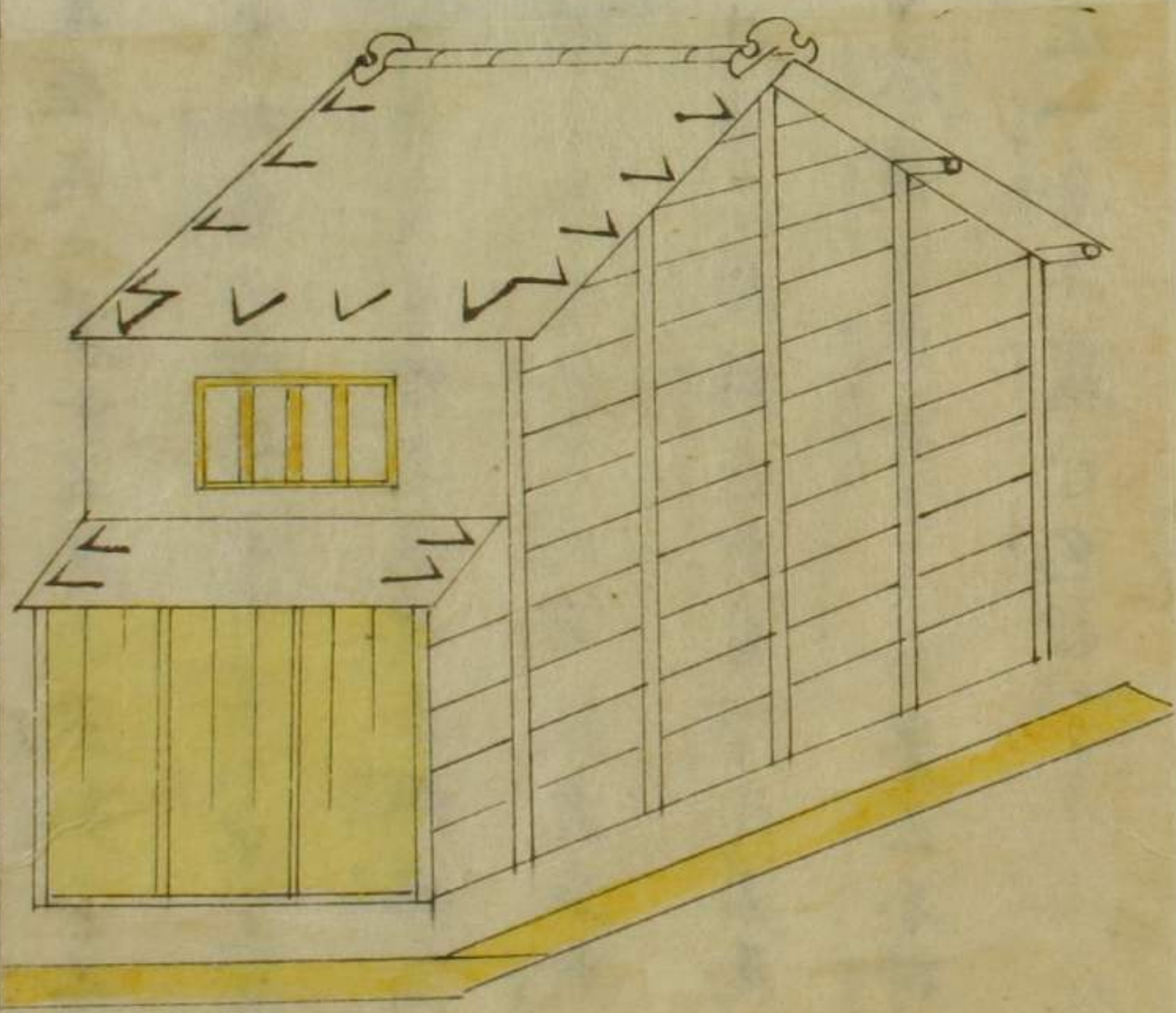


右の第三号柿葺一軒建一棟の家を庇すて防火幕とて
 包むるが尤火災の節を必だ烈風ある事多けまが
 吹まらざるが用心第一あり故小屋根上を第十四号
 の防具用の鐵具を以て手壁くるを並に軒上前後左右
 を防火幕三尺間小第十八号の両頭角を掛防火幕と
 縫ひて其合せ目の第十七号の鉄針とて縫ひて又雨落
 の処を第十六号の向りありする手壁とて並に一は小屋根
 格外高く防火幕縫ひ時と第十八号両頭角を掛て縫

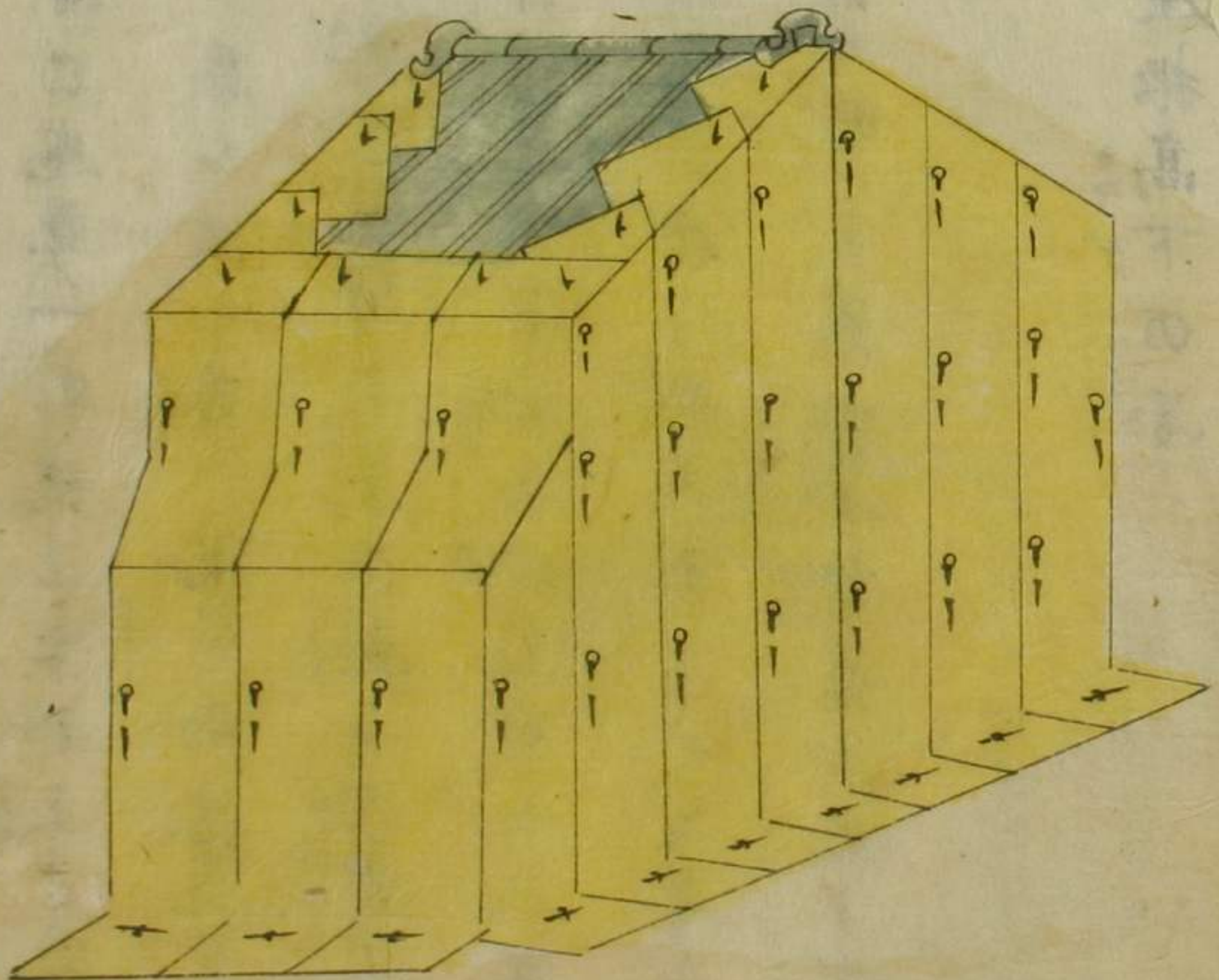
足しを合せ目を第十七号の鐵針とて縫ひて

第五

尾葺一軒
 建の部

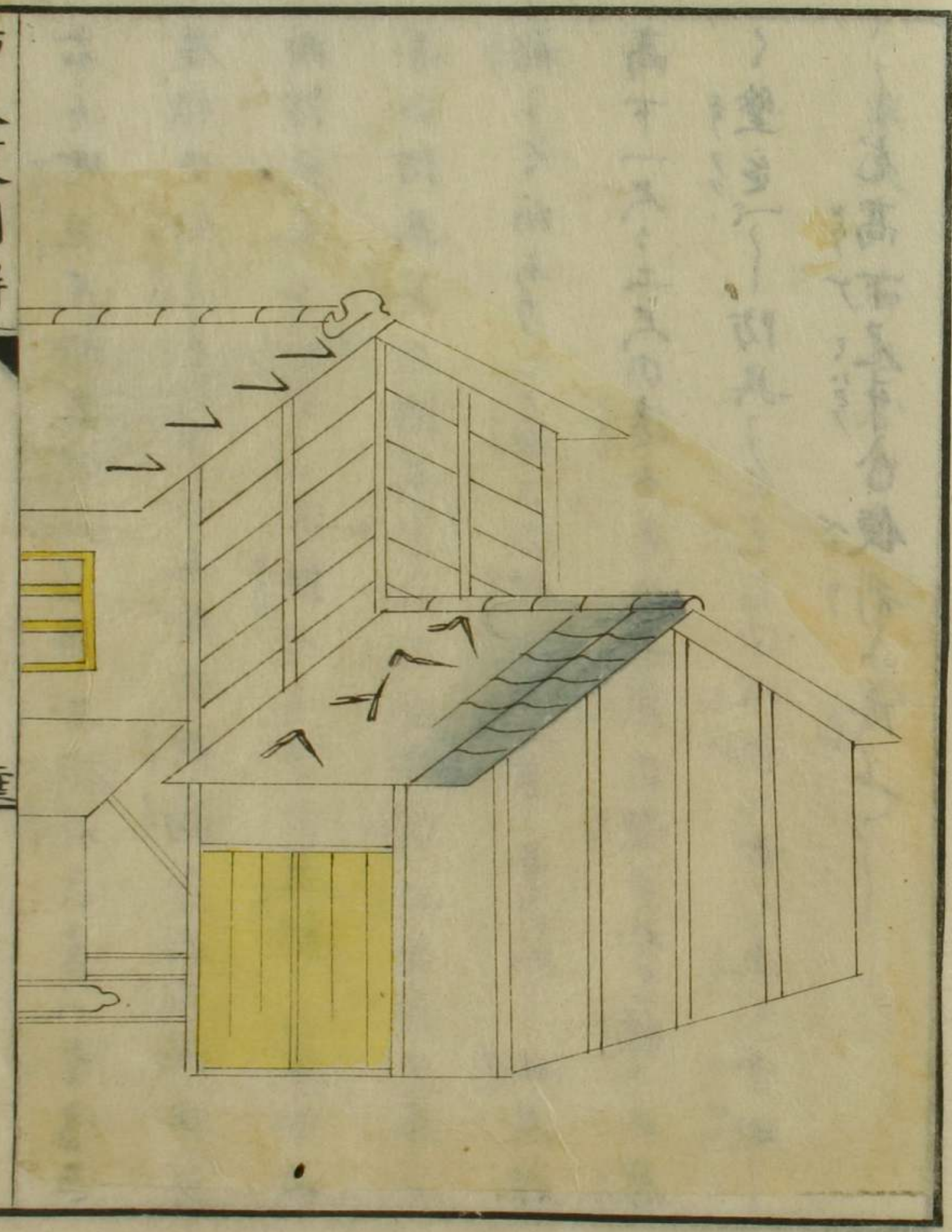


右ハ尾葺一軒建の屋根上小茅十五号の鐵鉤を三尺
 間小抄附たる為之尤雨落の下向あり為ハ茅三号と
 同根小堀込^{ホリユ}且尾葺を屋根上小火の燃移^{モトウ}るべ
 きの憂^{ウレ}おさぬ小屋上をも包まば前後左右軒端^{ノキバ}
 以下斗り包むべき仕方小鐵鉤をお付べし若尾ぬ
 ぐも尾下の上^{ウス}落く燃^ヒ焼^{ヤケル}の氣をわらば茅三号柿葺^{モシラフキ}
 の仕法小俣^{ナラ}小屋上一角^{イチノ}小覆^{オカ}小包^マむべし
 第六 尾葺一軒建を包むる為



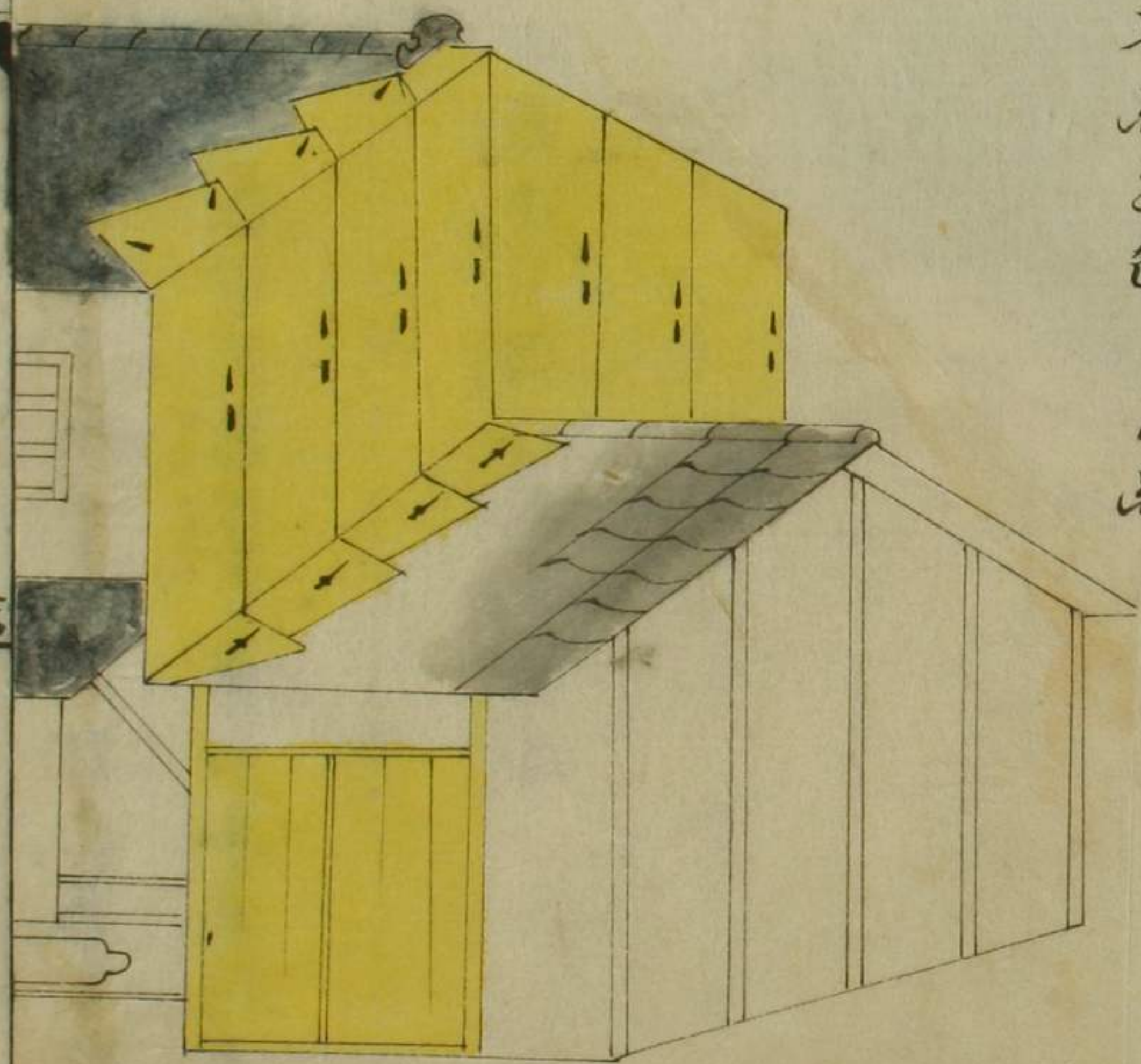
右と第五号の尾葺一軒建の家軒上より前後左
 右斗り防火幕を以て覆ひ包み雨落のまゝハ第三
 号の向りありぬ防火幕の裾を手巻く縫ある
 号と尤棟高く防火幕短き時と第十八号のあ次
 角をより縫足は他尾葺より尾内めぐり土
 薄く氣をある時と第四号柿葺の包み方不似入

第七 屋根高下の号



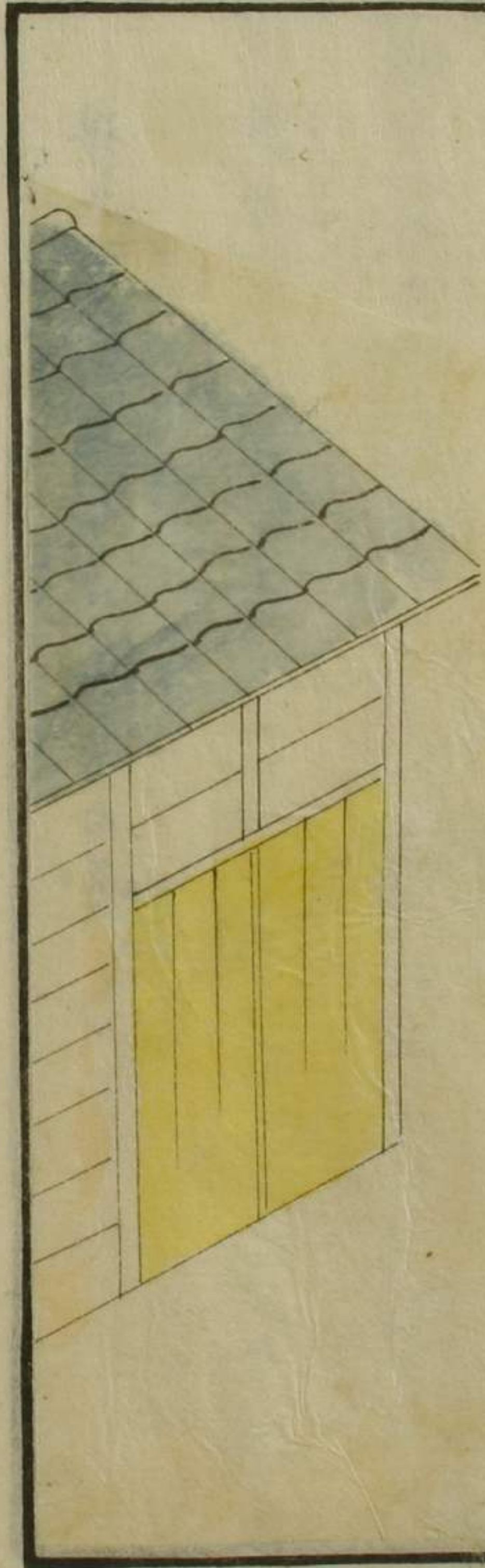
右々町並屋根高下りる事等の如き要ハ其高き
 屋根の軒上より茅十五号の鉄釘を三尺間小お
 附防火幕をかけるの便り下屋根より茅十四
 号の防具用の鐵具を三尺間小お込込防火幕の
 裾より向りりとするの便り車等の如く但屋根
 高下一尺二尺の遠を在ハ土蔵の壁の如く頑どめ厚
 く塗をべし防具より包むの心配もかく至く手廻し
 より尤高下り等ハ便利小防ぎ

第八 右七号を包むる等

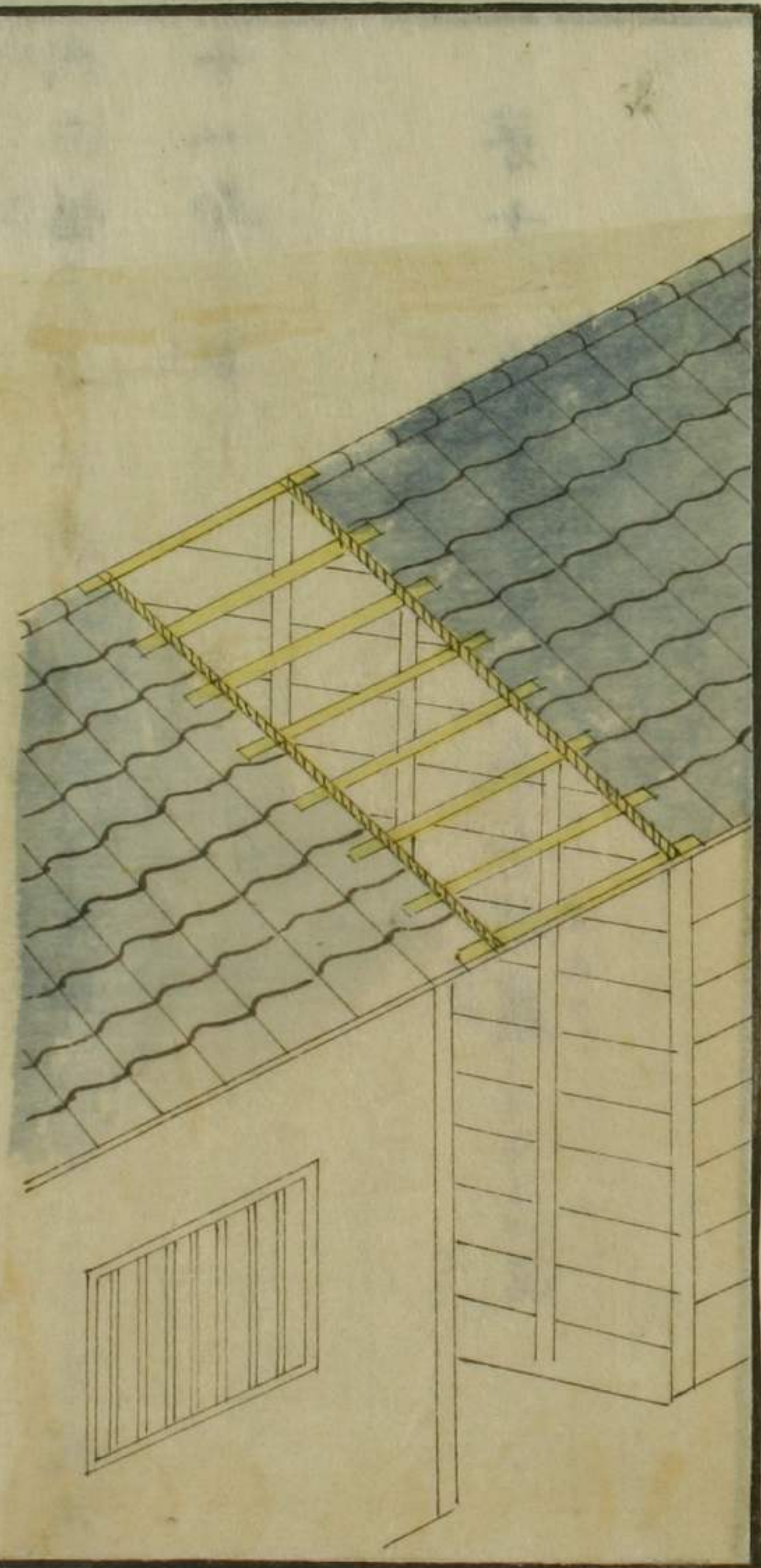


右の茅七等の屋根高下向る事を防火幕として包
こむ等々尤前後左右の色方も茅四等茅六等小
俵など

第九 路次新道を防ぐ仕掛の事

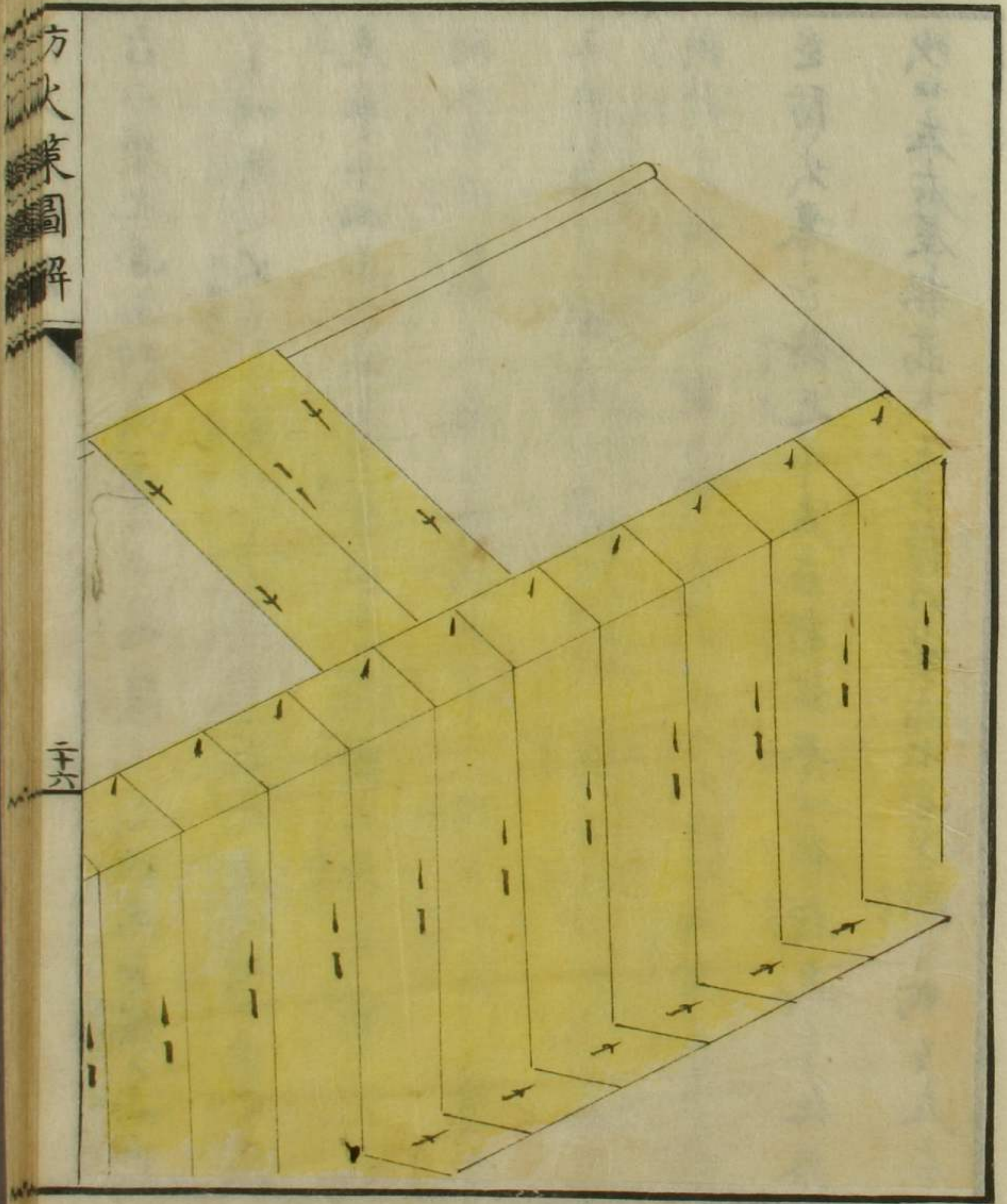


右の町家往来を隔て向側より吹く風の火共
を拒ぐの法は是の路次或は新道等ありて町並



の屋根三尺五尺六尺の切目^{キメ}のり^メを塞^サぐ^フの
 左右屋上棟^{アウエ}より軒端^{ノキバ}と第十一号の繩階^{イハ}子の^ゴ取^テ
 ある^ナ物^{モノ}を引^ヒ込^コめ^テ左右の屋根と同様^{ドウヤウ}小^コ立^{タテ}て^テ尤^{モト}も
 次^{ツギ}の幅^{ハタチ}大小^{オホコト}を^シ適^{テキ}宜^ギ小^コ製^{セイ}作^{サク}し^テ定^サむ^ルを^シ法^{ホウ}第
 十一号^{ジュウイチゴウ}小^コ妻^メに^シ

第十 右号小防火幕を被覆^{ヒフク}し^テる^ル事^{コト}
 オホフ



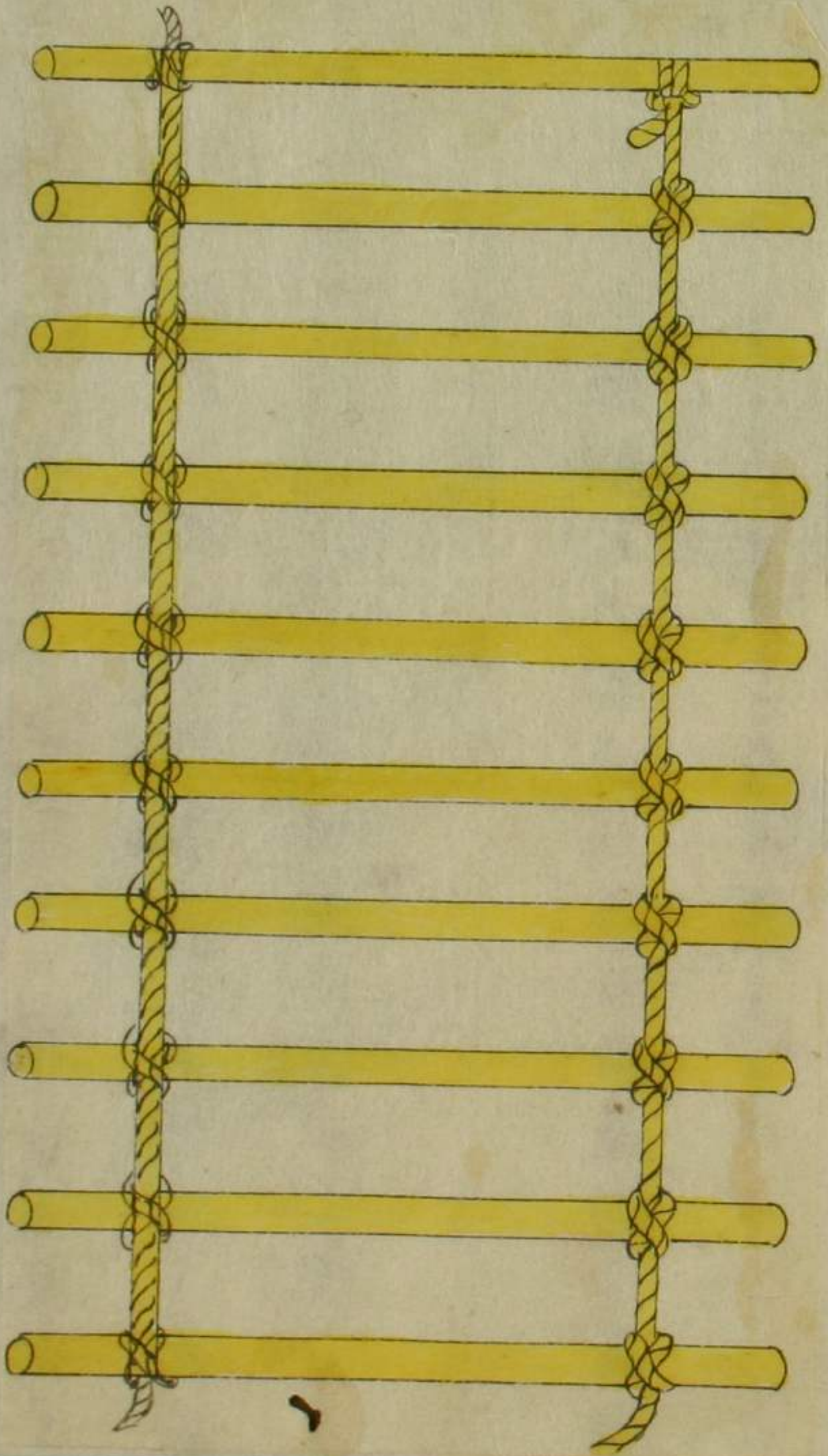
防火策圖解

三六

右ハ第九号小防火幕を被覆して往來を隔て向側
 より吹拂る火尖を風下より防ぶの爲に右の如く包む
 先第十四号の向り方を左右の軒上表より裏と二尺
 間小抄附防火幕を前の軒上より棟を打越し裏の軒
 上より後へて被覆し左右の向り方を包むを合せ目も
 鉄針を縫合せ前の軒上より第十八号の両頭端を掛
 け防火幕を終了し左右軒端並小被覆をして他路
 吹口左右屋根高下なる處の第六七号を照し或は左右

別小被覆するもすしを模様便利小防ぎ

第十一 路次の間を塞ぐ具の号



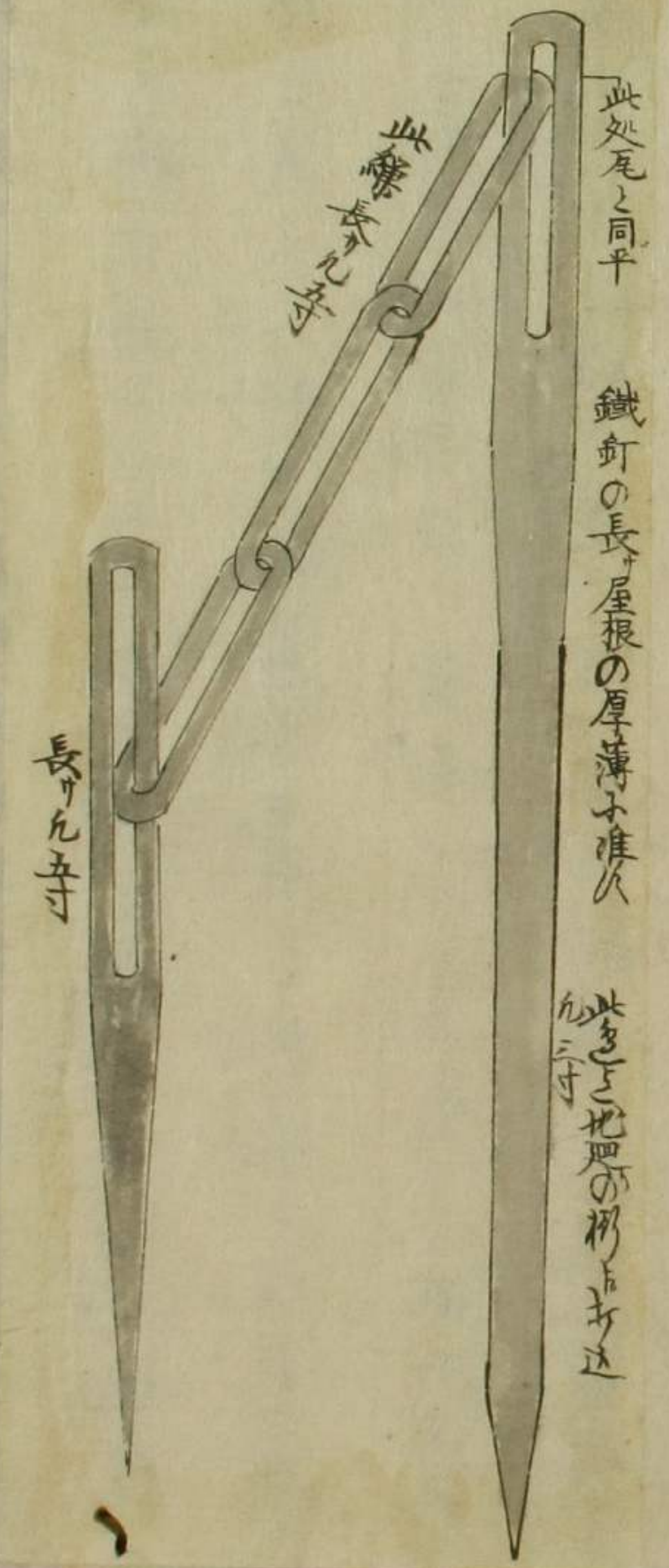
右も間敷三十間或も五十間もある御屋敷沙長家向
 小燃付大風猛火より防ぎ方あり時急の如く遠近
 適度を見申す五六尺の間を手早く尾をめぐり
 板貫垂木壁あり床板も悉く瓦敷棟木梁桁
 等の如く残し切抜ぐ此切口の要を第十三号の
 如く防火幕より被覆せど如何ある劇風猛火より
 とも急を遮隔するに至る

第十三号 右十二号切抜包方の事



右も第十二条の長さ家切口の防火幕を被覆する
 此の包方も防火幕一枚を棟を越えて前後軒上
 へと向くと睨と為る亦棟木より草の大小は
 防火幕と切替第十八条の両頭向を以て包め
 く掛垂さげ合目と鉄針とを以て此幕の向不
 りる合の瓦石を重ねて押へて又棟木梁
 桁等も防火幕を以て包めぬ各巻め鉄針を
 きり前後軒端も第六条の如く包むべし

第十四 板屋根防具留鐵具の形

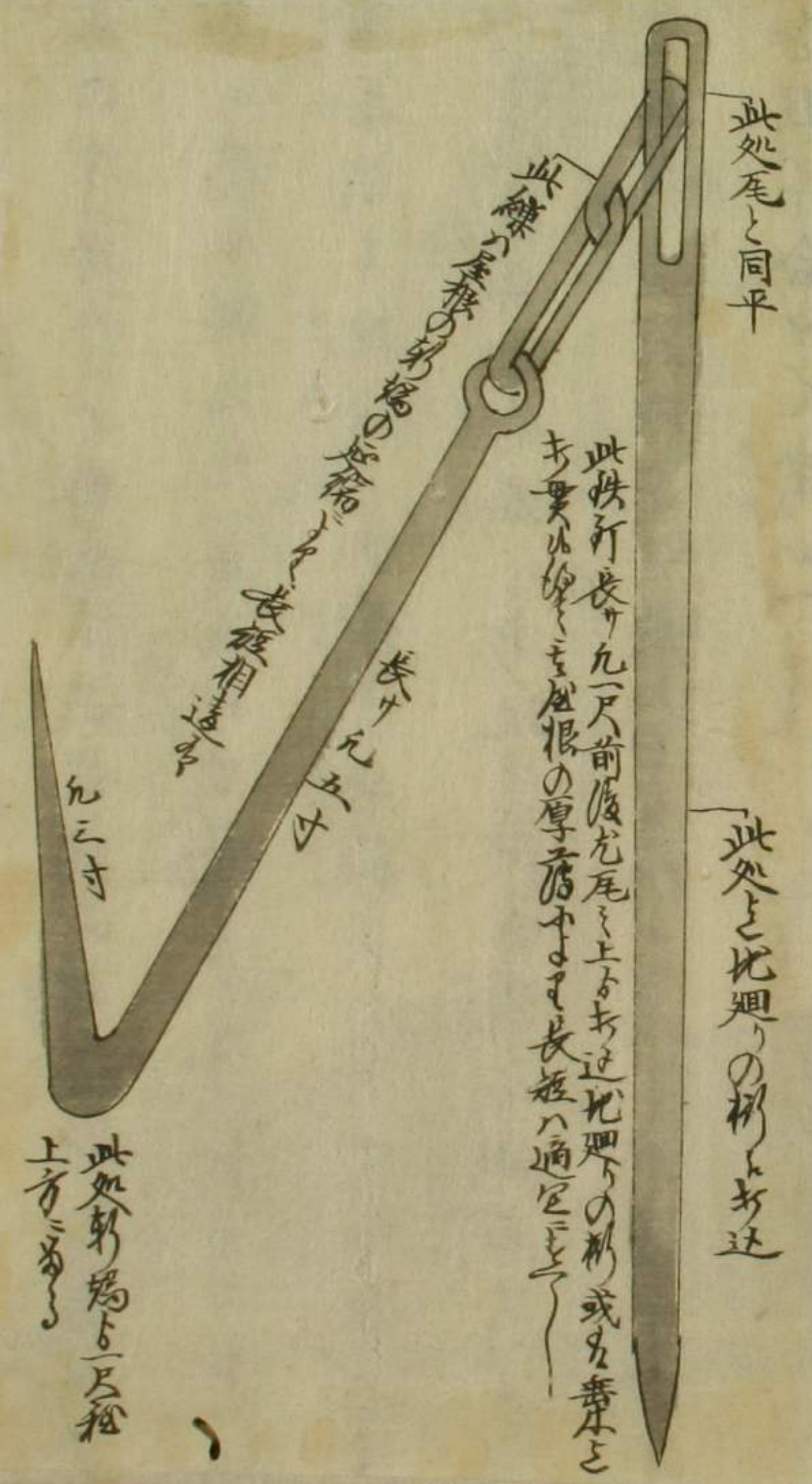


此処尾と同平 鐵釘の長 屋根の厚薄に準り 此處は地盤の初より迄

長九寸

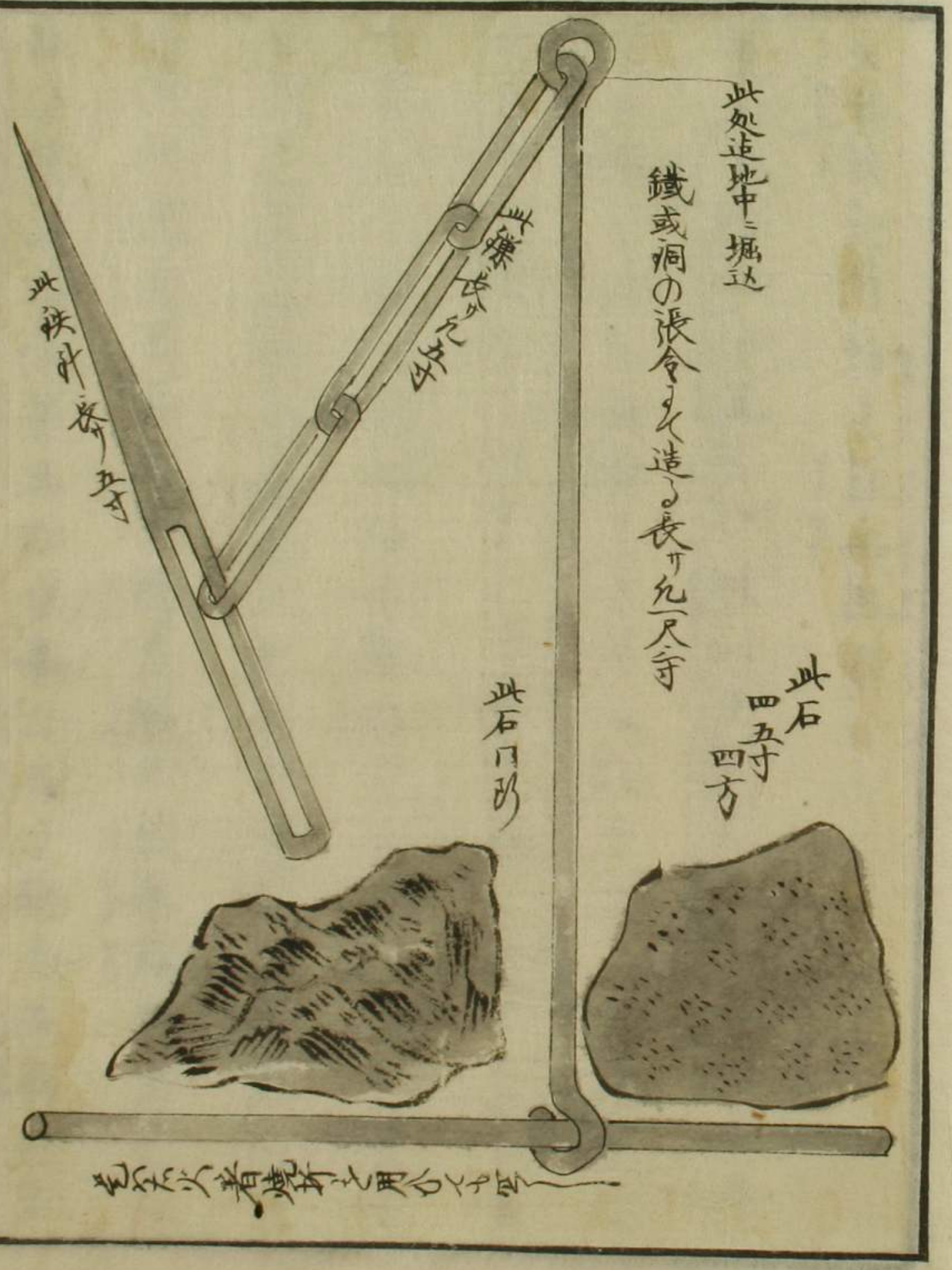
右も第三四号の板屋根小月内べきまの防具為鉄
 具ケのふえ又第七八号町並屋根高下あるまの防火
 幕シの裾シをあるトムかも用ゆ火災の時を必以劇風多
 因く屋上一面イナ小被覆イナする時を烈風シの向り吹ま
 くり等此防具を以て堅ケンをゴふきト為トるべし但此防具を
 屋上小お込時ハ第二十一号の防具を拵添キてお込トる
 然シがれも鐵釘の穴をシおひトる事あるを鉄釘シハ垂木
 或も地廻チマハリの桁ケタと深フカくお込トる

第十五 尾屋根防具為の角カキの角



右ハ尾葺^{カシラヅキ}の屋根^{カシラ}と前後左右軒端廻^{キバ}りを被覆^{ヒツク}する
 不用^{フナヒ}の具^{ツグ}より軒上^{ノキ}小三尺間^{コサウチ}小折込^{コサグミ}を鐵具^{テツグ}の
 角^{カド}へ是^{コノ}を軒上^{ノキ}九一尺五六寸^{クニシチウチ}登^{ノボ}りて尾^ビの間^{ノマ}より折込^{コサグミ}
 垂^{ツリ}本^ホ或^シは地^チ廻^マりの桁^タと折込^{コサグミ}は^{サト}く^ハ是^{コノ}亦^モ第二^ニ十
 一^トの鐵具^{テツグ}を持^テ添^ソて折込^{コサグミ}を折^マりて頭^{カビラ}を油^{アブラ}石^{シツクイ}灰^{ハイ}より
 敷^シ遍^ヒ塗^マる^ルを雨^{アメ}水^{ミヅ}の漏^モ入^コる^ル板^{イタ}小^コま^マす^ル一^ト尤^{モト}第^ニ十^ニ四^シ番^{バン}
 と照^{テラ}合^アせ^テ考^{カガ}へ^ル

第十六 防火幕のありの爲^{ドメ}鐵具^{テツグ}の系



此処^{ココ}地^チ中^{ナカ}掘^コ込^メ

鐵^{テツ}或^シ洞^{ツツ}の張^テ令^{コト}を造^{ツク}る長^{ナガ}九^{クニ}尺^{シチウチ}寸^{サツ}

此^{コノ}石^{イシ}四^{ヨウ}五^ゴ寸^{サツ}四^シ方^{ハツ}

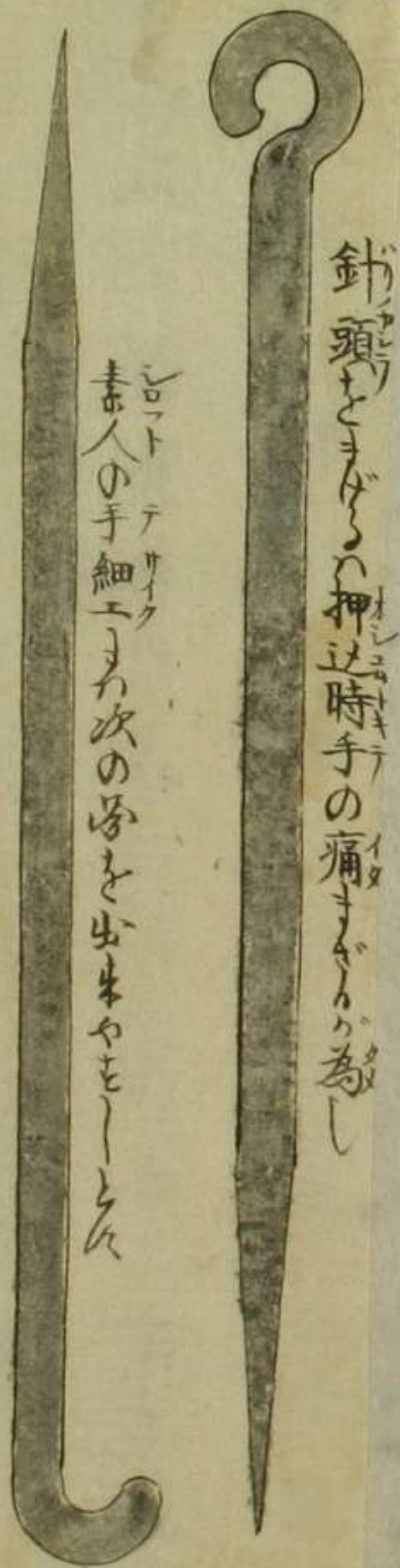
此^{コノ}石^{イシ}口^{クチ}形^{ガタ}

此^{コノ}鉄^{テツ}針^{ハリ}長^{ナガ}九^{クニ}尺^{シチウチ}寸^{サツ}

此^{コノ}石^{イシ}は^シ火^ヒを^シ防^コぐ^ル爲^{ドメ}に^ツ用^ユひ^マす^ル

右も第三四号第五六号等の如く家の兩落の下
 三尺間^{フセキ}に伏^{フセキ}を防火幕の裾を押^{オサ}へる劇風^{ゲキフウ}の向^{ムカ}なり
 吹ま^{フク}くると防^{マン}ぐの鉄具^{テツク}は是^{コノ}の釘頭^{クギカシラ}を平^{ヘイ}地^チ並^{ナミ}より
 一寸^{フカ}深く掘^{ウリ}込^{コミ}め^メの如^ノく横^{ヨコ}鉄^{テツ}の左^{ヒダリ}右^{ミダリ}小^コ石^{イシ}を載^セ置^ケ
 處^{トコロ}に埋^{ウメ}入^ル劇風^{ゲキフウ}の向^{ムカ}なり^{コト}も堪^{タマ}ゆる様^{サマ}に志^シす^{コト}は是^{コノ}亦^モ平
 日^ヒも鏢^{サシ}を縮^{チヂム}め鉄針^{テツシン}をま^マとめ六寸幅^{ムサハシ}の板^{イタ}割^ワを以^もて
 茅^{チガハ}三^{サン}号^{ゴウ}の如^ノく蓋^{フタ}を^マし^テ押^{オサ}へ^ル急^{キウ}火^カの節^{フシ}を板^{イタ}と
 瓦^{カワラ}片^{カタ}付^ケく鉄針^{テツシン}を引^{ヒキ}立^{タテ}用^{ヨウ}の

第十七 防火幕縫合^{ホウカクヌイフ}鉄針^{テツシン}の形



針頭^{チノカシラ}をま^マし^テ押^{オサ}へ^ル急^{キウ}火^カの節^{フシ}を板^{イタ}と
 瓦^{カワラ}片^{カタ}付^ケく鉄針^{テツシン}を引^{ヒキ}立^{タテ}用^{ヨウ}の

右^{ミダリ}の防火幕^{ホウカク}の合目^{アヒメ}を縫^{ヌイ}合^フする為^{タメ}の鐵針^{テツシン}の形^{カタ}は是^{コノ}
 へ防火幕^{ホウカク}の横^{ヨコ}幅^{ハタ}三尺五寸^{サンシゴ}ある故^{ユエ}に五寸^{ゴシウ}を重^{カチ}ね
 合^{アヒ}せて此^{コノ}鉄針^{テツシン}を以^もて^テ縫^{ヌイ}合^フする劇風^{ゲキフウ}の向^{ムカ}なり
 吹^{フク}ま^クくると防^{マン}ぐ^{コト}の鉄具^{テツク}は惣^{ソウ}じて合^{アヒ}目^メの透^{スキ}間^マ

開きのなる木を鉄針を以て縫寒さづき其救を
 の大小由く多少あるも割合より二十本五十本の余計
 小板へはるへ是を手細よく可へ太サ板著の鉄
 線を長サ八寸小切り一端を折まが一端の鋭角破
 しく摺り合の如く針の形小製作を

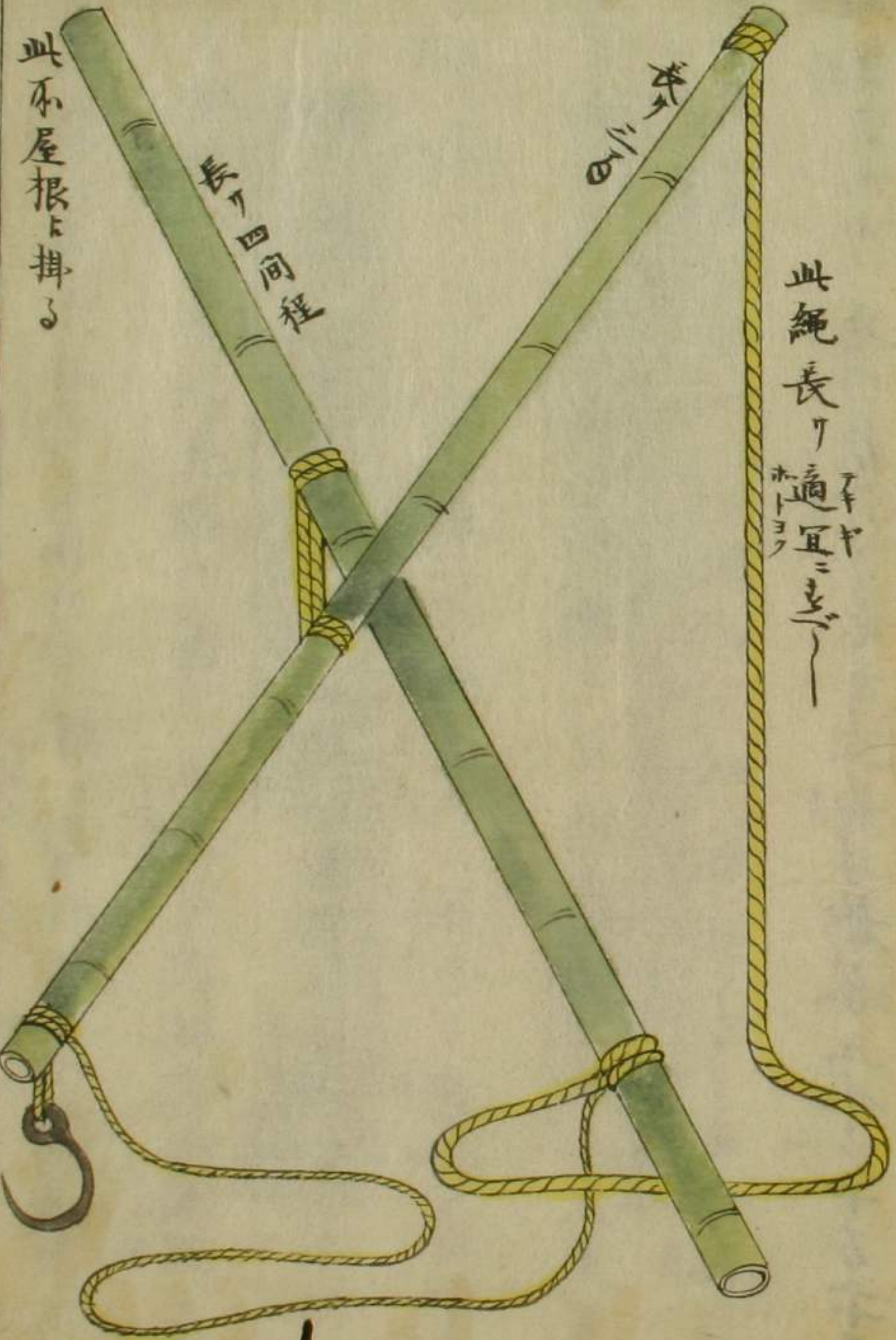
第十八 両頭鉤の形



右も防火幕の短さを終足以小用ひまゝの板屋根
 一面小被覆しる時軒上小此角を三尺間小掛
 く前後左右軒端廻りを包む不用ゆゑ鐵具之長屋
 の切口を被覆するも用ゆ即ち第四号第十号第
 十三号を照し初考次ぐ

他は角をかけ終足する防火幕の合目並み小と附
 兼透る時ハ第十七号の鉄針を横小差込塞ぐ

第十九 俵鉤の形

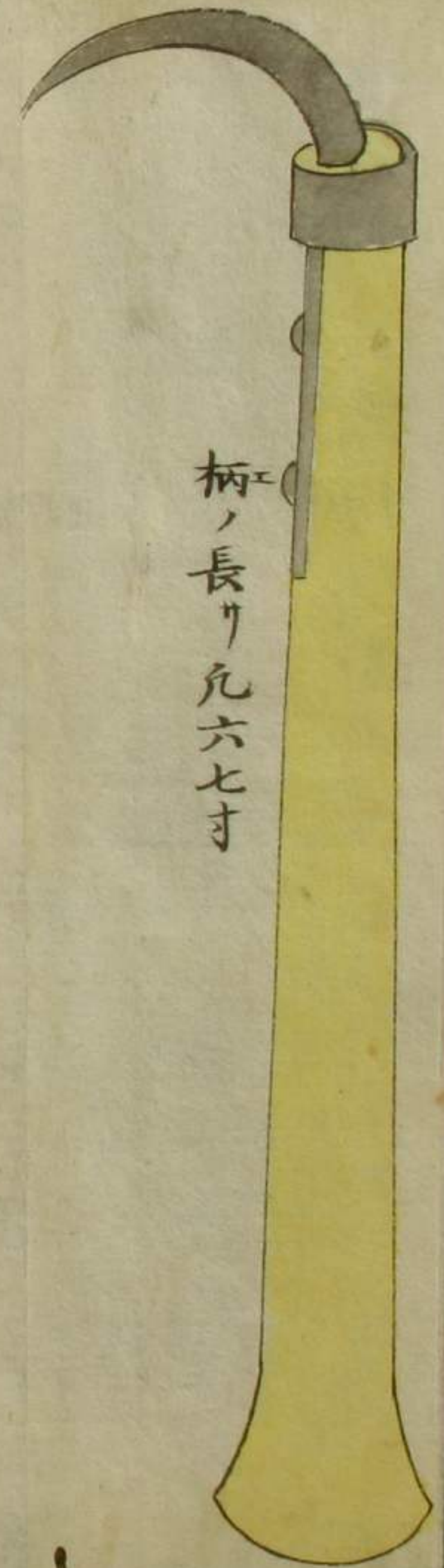


第二十のちね釣の器

三

八

右ハ防火幕と云れ扱ふ必用の具なりて平甚難下業船改松
 の所持する要の儀為と云へる扱へ魚商人の釣も柔弱なり
 用不堪ざるもの多し此儀為を兼底よく研成丈為先
 を鋭尖なりて用ぬべし是も亦よく必用意致し
 人足一人小一挺で持て用る事と心得べし

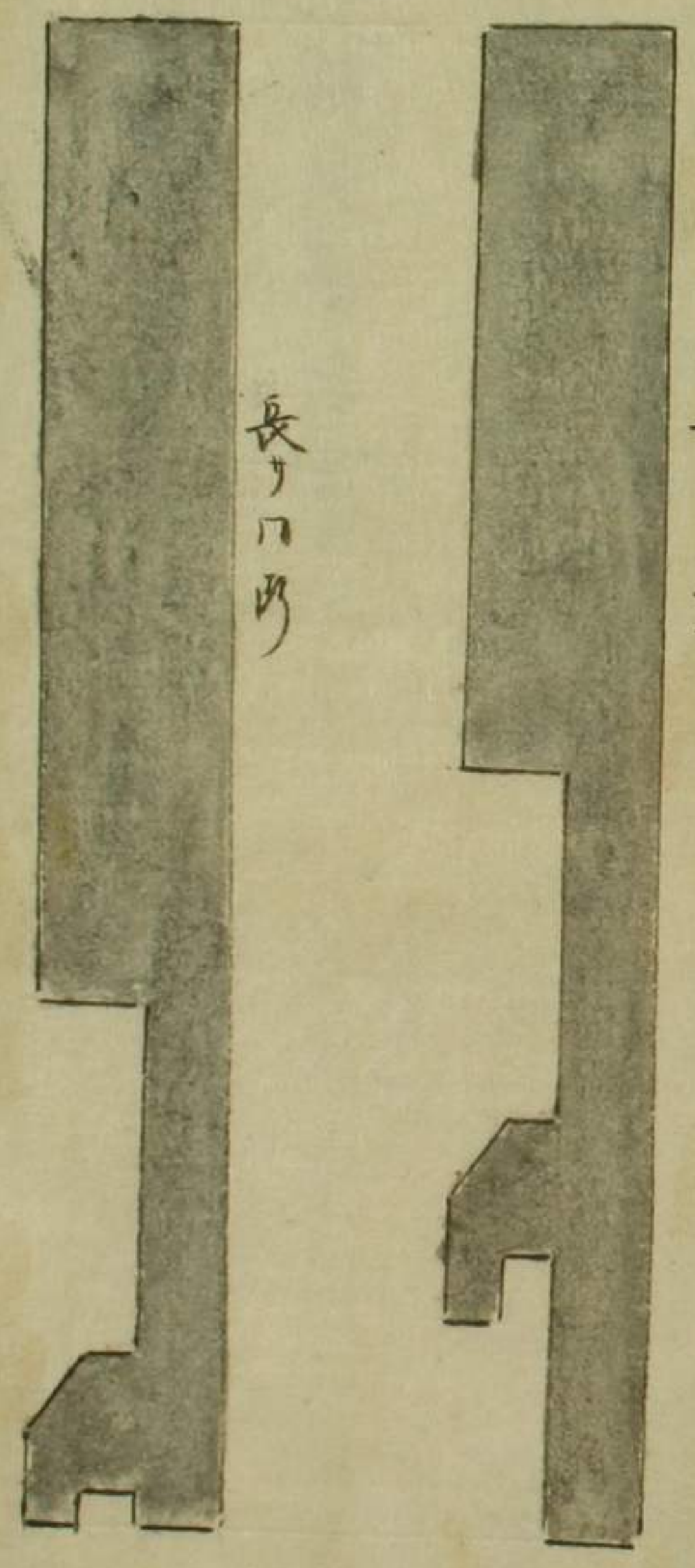


八

右に防火幕を屋上オシラに懸カケりける用具ヨウグにて堅カタの竹タケ長ナガサ三
 四ヨウ尺横竹ヨウサキ二ニ尺半位屋根の高下タカサ小コ径キョウにて長短大小適宜テキギ小
 切り麻アサの繩ヒモとて巻マキの如ごとく小製作コセウ軒端小立掛一人ケンヘコタケヒトの竹
 の元ノヘを押オシ一人の防火幕を鎮火水チンカスイ小投入コウニリ薬水ヤクスイを十分小
 舎カせ九丈クにて狗小掛一人の屋上カギコケヒトに引ヒキ向ムカひ一人を軒上ケンジョウにて又九
 五寸重オモ小並ナリぶ一人を鉄汁テツシを以もて合あ目めをききぬぬをを襦じゆを
 雨落アメノの向むかひりぬぬの鉄釘テツナギををくくききぬぬ都合五人トウゴフヒト十トウ尺シヤク二ニ尺
 或アは五十イハ尺シヤクのの口クチも忽ツち色シをを終ハるるべべくく手廻テマへへ急イ速ソクかかし

第二十一 防具ドモ為持添モキマシお込ウチユム鉄具テツグの形

長ナガサ九ク尺シヤク五イ寸スン



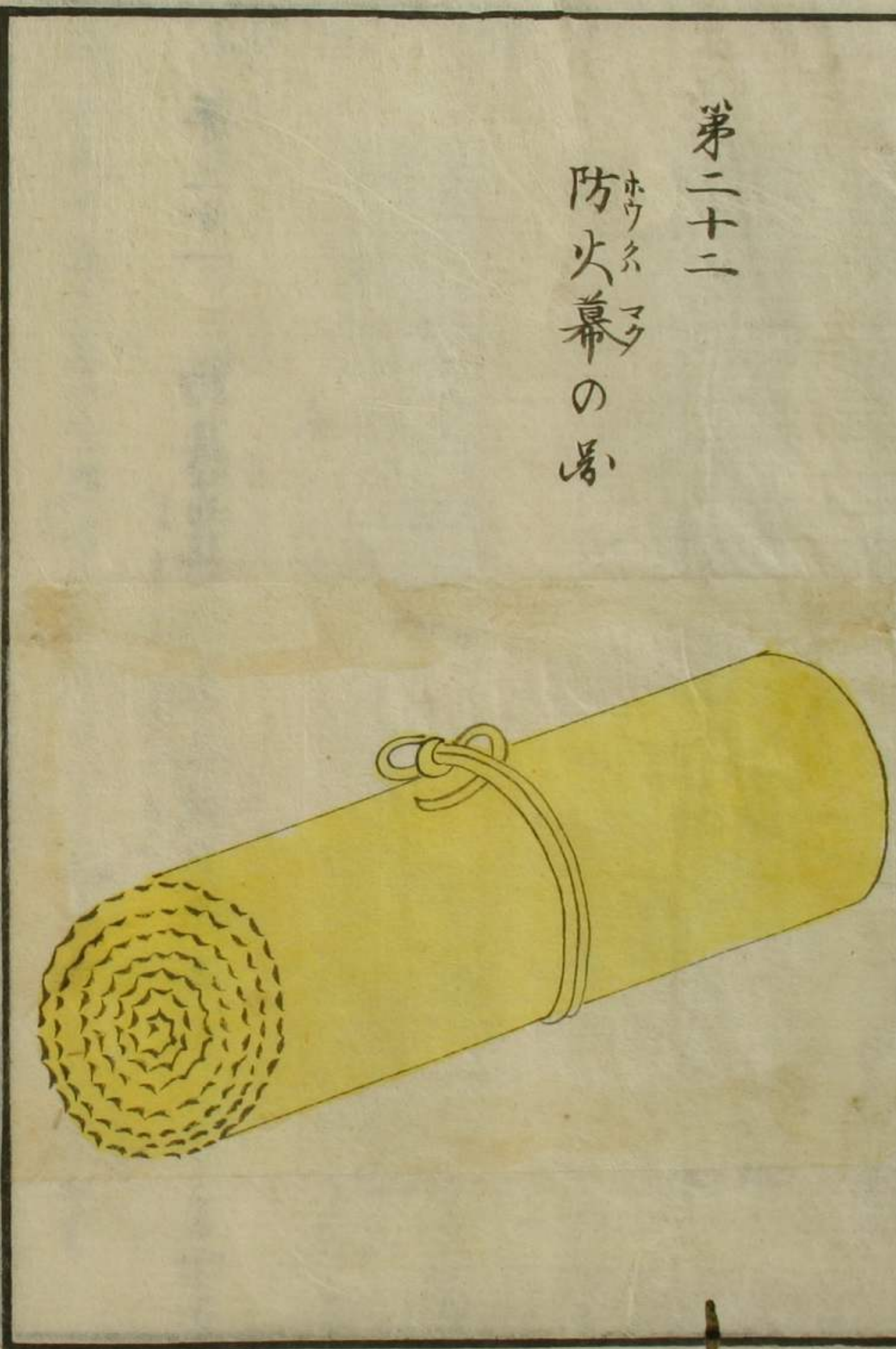
長ナガサ九ク尺シヤク

右ハ第十四号第十五号の屋根上防具ドモ為の鉄釘テツナギの頭カビ

の穴をおひしーがざる板お持係しお込為の器具也

第二十二

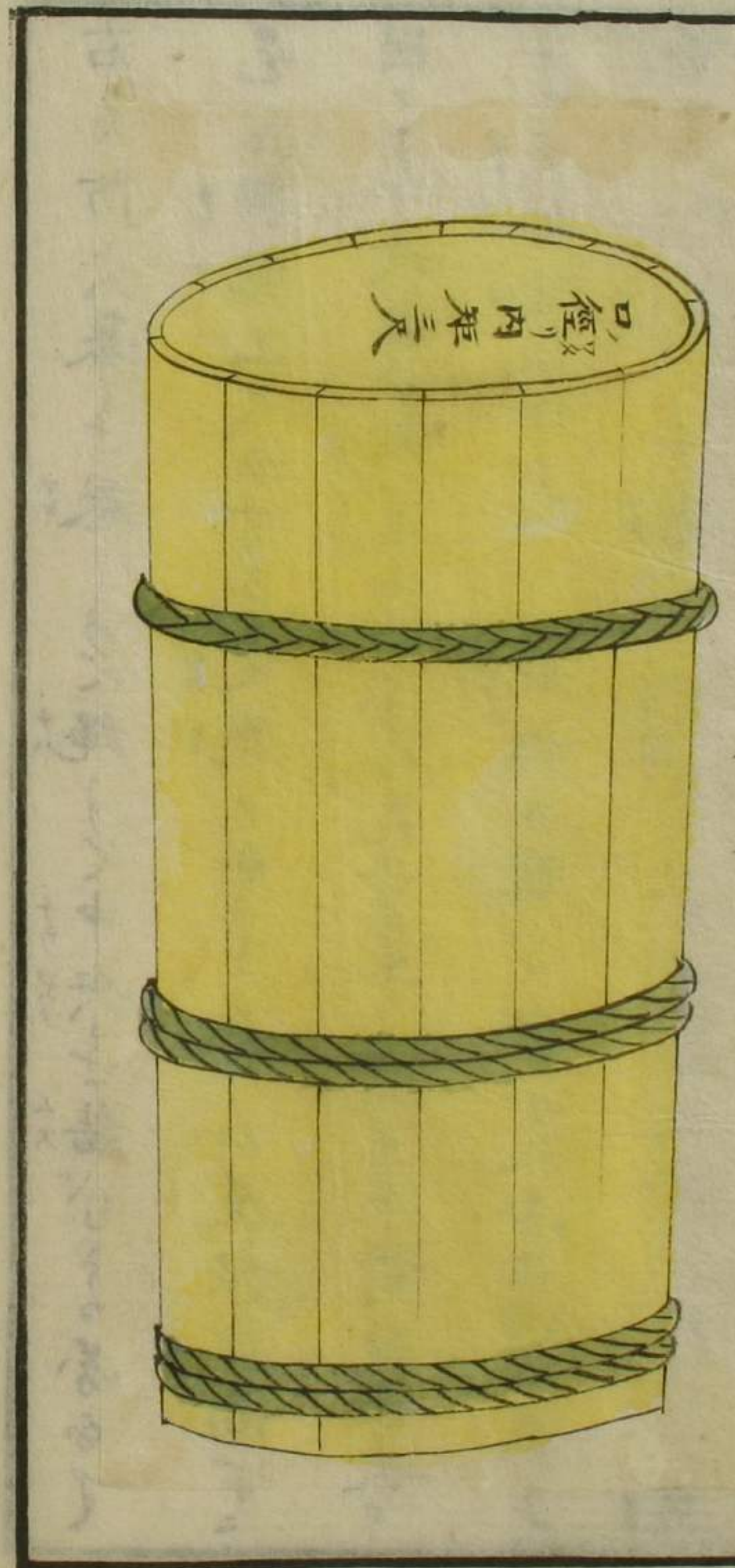
防火幕の巻



右に防火幕を巻しめて繩より中央を結びしる巻を
 是れ横幅三尺五寸を定規とかり長サの屋根の高下
 因り各長短の相違あるも凡二万半も三万半前後の長サ
 多く大概る小なりしる若短し時を第十八号の両頭角を
 結して色むしりて透あしるが第十七号の鉄針と横
 小きしるむしりて色むしりて方角の巻をなす鎮火水小投入十分小
 薬水を含せ徳角より持運ししる徳角より屋上より揚合
 目五寸づ重落く軒上の角小掛しり尤合目も風下

小向カ小重ヒ孫サぶフ防火幕カ造法ゾウホフの末ス小妻コメ一
 第二十三 鎮火水チンカスイを貯タケる桶オケの居カ

深ナカり内ナカ矩リ六尺



右ミも鎮火水チンカスイを貯タケる桶オケの居カうテ此費用ヒヨウキ板イタの六寸貫スキ
 凡ソレ十七挺ヒツを以ツて造ツクる底ソコを以ツて出来ツクる右ミの寸法スベテを鎮
 火水チンカスイ凡ソレ五石五斗七升余イッパイを入イる一ヒト是コトを足タ世ヨの軒下ケンゲ内外便
 利イ宜イき重オモい土中ツチナカ掘コ過ヒ雨水ウメ塵芥チンカイ等トの入イる桶オケ小蓋コタ
 をツて上ウ面ツを平ヘらツ歩ホ行コウしテも苦クくクる桶オケ小蓋コタ一ヒト夜
 一ヒト此桶オケ薬水ヤクスイを貯タケる時トキの板イタ百年ヒトトシを短ハく朽腐クサの患ウ
 をツて鎮火水チンカスイ五石を以ツて防火幕カ凡ソレ百板ヒトヒトを短ハくクサるクサるクサ
 薬水ヤクスイ代カ銀ギン凡ソレ二拾五ニジュゴ斗ト二十ニ斗ト前後ゼンゴより出来ツクるクサるクサ

鎮火水

予曾て樽タルの古コきものを折ウチ碎タり薪タとちり火中ヒに投ナげど
ふ火ヒもろくく火ヒ因ユて竹タケの枯カ枝エを添ソへて風カゼを加クふ
まじも更サに燃モえろく火ヒ爰コに於オけり其ソノ様サマの由ユ來キと吟ギ味ミ
しけるに其ソノ以前イマ豆腐トウフ屋ヤとて年トシ來キ苦カ汁ジツを入イ置キる
其ソノ古コき様サマの由ユ是コト見ミ小コ因ユて又マタ試シふ猛マウ烈レツある炭スミ火ヒ
小コ苦カ汁ジツをそめて消ケ火シせしめ其ソノ消ケ炭スミを復マタ火ヒ中ナカに
投ナげ風カゼを以モて扇アヒぐ小コ火ヒも更サにろく火ヒ始ハジて苦カ汁ジツ

汁ジツ小コ鎮チン火ヒの奇キ功コウある事コトを發ハツ明メイし更サに西セイ洋ヤウ奇キ術ジュツ
の譯ヤシ書ショを乞ケて檢ケン閲ゲツする小コ書ショ中ナカに鹽エン酸サン加カ里カリの水ノミ
中ナカに溶ユウ解ゲツしるものを鎮チン火ヒの用ヨウに施ホコす少シ許キョの
藥ヤク水スイ多タ分ブンの水ノミ小コ勝マサするの奇キ功コウあるとて然シカまども
鹽エン酸サン加カ里カリを製セイせんときる時トキも其ソノ費ツ亦ナ必ヒツあり火ヒを
邦クニの苦カ汁ジツも鹽エン酸サン加カ里カリを合アむ半ハ元ゲンより多タく故コトに
法ホウ火ヒの奇キ功コウある半ハ鹽エン酸サン加カ里カリ水スイ小コ聊リョウ々ト異イある半ハ
も此コノ苦カ汁ジツも濱ヒ海カイ塩エン電デンして食シヤク塩エンを製セイする

妻の塩の煮汁を煮るに塩漬の影くもてそ
 肉聊り賣買して豆腐屋の用ふのミ充てそ餘も悉
 く汲捨ふあるもの也東都近海くも行徳大師河原
 金澤五井君塚等の塩漬く影く出来く又四
 國西國筋の海濱を殊小塩漬多く東都に積束る
 季の赤穂齋田徳嶋坂井出瀬戸瀬戸田波止濱姫
 松竹原松永三多尻野崎若外海濱影くくりま
 ば何方くも苦汐汁の事をかき半あり唯汲五人

夫運賃の多しと至極下直の品も尤毎年四五月
 七八月との為と別く多く食塩を製く苦汐汁も
 餘多出来は冬月より至り少く且晴天小多雨天小
 少く宜く下直の時を考へて求め貯め候

防火幕

予又曾く古き藁藁を前條の鎮火水小投入浸漬
 して猛烈の火中小投して試しに更小焚燒も
 半あり是小因り防火幕を製造して烈風猛火の

火尖を防止ホウシ諸人小火災の大害を脱トク免メと
 欲ホシキリ以ヒシキリ因ヒシキリて思ヒシキリふ上州野州辺の色鄙僻地の農民
 貧窮の家々ヒシキリ床上の敷物不用る妻の藁ヒシキリと唱ヒシキリふ
 厚ヒシキリ是ヒシキリを今ヒシキリ迄ヒシキリ小ヒシキリ飯ヒシキリ小ヒシキリ為ヒシキリ又ヒシキリ一ヒシキリ等ヒシキリ精ヒシキリ密ヒシキリ手ヒシキリ丈ヒシキリ夫ヒシキリの造ヒシキリ方ヒシキリを
 工夫ヒシキリ以ヒシキリ先ヒシキリ太ヒシキリ小ヒシキリ指ヒシキリ程ヒシキリの繩ヒシキリを縦ヒシキリりヒシキリて能ヒシキリくお和ヒシキリする
 藁ヒシキリ三十根斗ヒシキリりを二手ヒシキリ小ヒシキリみヒシキリかヒシキリるヒシキリく編ヒシキリ付ヒシキリを厚ヒシキリ九
 一寸斗ヒシキリり小ヒシキリあヒシキリく聊ヒシキリ透ヒシキリるあヒシキリき振ヒシキリ念ヒシキリ入ヒシキリ仕ヒシキリ立ヒシキリべヒシキリく他ヒシキリ横
 幅ヒシキリ三尺五寸と度ヒシキリとヒシキリく長ヒシキリの屋根の高ヒシキリ小ヒシキリ應ヒシキリト九二

間半より三間半前後小造ツクるべし平日ハ茅廿二等の如
 く小卷マキの中程を繩ヒシキリりて結ヒシキリぶ庭家の周圍マハリも敷
 小引合ヒシキリを敷ヒシキリ十枚用意ヒシキリ急火の首ヒシキリ九出ヒシキリく方便ヒシキリ利
 宜ヒシキリき場ヒシキリ下ヒシキリを考ヒシキリへ定ヒシキリく貯ヒシキリへてヒシキリべし
 ○手過テアワチりて出火ヒシキリ初ヒシキリ釜ヒシキリ燃ヒシキリ向ヒシキリぐヒシキリらんヒシキリとヒシキリる時此防
 火幕ヒシキリを手早ヒシキリく鎮火水ヒシキリ小ヒシキリ投入ヒシキリ火上ヒシキリ被覆ヒシキリせ即
 時ヒシキリ小ヒシキリ急火ヒシキリ止ヒシキリす
 ○万ヒシキリ一急火ヒシキリのハ防具掛ヒシキリりの人足ヒシキリ一人ヒシキリも階子ヒシキリを

掛く屋上ト登りル第一二番の櫓ヲの角ヲを帯ヒ掛ク第十九番
 の俵ヲ角ヲをテ手ヲ持ツ一人ト第二十番のト縁ヲ角ヲと軒ノ端ハ
 小五掛ヲ根ヲを押ス一人ト第十七番の鉄針ト革袋ヲ
 小入腰ヲ提テ踏ミ臺ヲ持ツ出ス一人ト防火幕ト鎮火
 水ヲ披キ入ル十分ト小浪ヲ濡シ一葉汁ヲ含メ頃ヲ分ヲ引
 りテ第一一人ト浪ヲ濡シ一防火幕ヲ持ツ運ビ小縁ヲ角ヲ
 掛く屋上ト小引ヲあが屋上ノ人足ヲ俵ヲ角ヲ小引ヲ引ク
 第五番ト第六番トの如く軒上ノ角ヲ掛ク縁ヲ目ヲを五

寸重ヲ縁ヲ順次ニ小並ベ掛ク踏ミ臺ノ人足ヲ鉄針ヲを以テ縁ヲ
 目ヲを差シ徹ス一第四第六番の如く縫ヲ目ヲ又テ裾ヲをハ
 第四番第六番の如く第十六番の向ヲ行ク角ヲの鉄針
 を差シ徹ス一ト色ヲ方ノ第三四番より第十
 二番トを参考ニ依リて
 ○右防具掛クりノ人足ハ十間二十間ノ長家ヲを被ヒ
 覆フもト人足ハ五人トあがテ十分ト小引ヲ廻ス一ト七間
 口ハ二番ト三番位ノ小家ノ人足ハ二人ト三人トもト行ク届ク一

○屋根格列カクベツ小高くして防火幕短くならざる時を
第十八番のあ頭端を以て終掛ツキカクべし若徒目小透モシテメ
あつハ第十七番の鉄弁を横小差ヨコサを定むべし

○市中町幅マチノハ凡三石前後あるをよりて向側より吹

りける火尖ヒサキを遮り防ぐる防火幕を一重通ヒトエドヲり包み

火勢強ツヨき処に左右より竜吐水リウドスイより鎮火水チンカスイを切

宛洒ツクぎ掛カケべし如何イカある劇風ゲキフウ猛火モウカの火尖ヒサキを二

重小被覆ヒフクし猶火勢劇ケキしく見ゆるをより鎮火水チンカスイを切

つもいさなり濡ヌルむ時を改カして類焼ルイシヤクの憂ウレヒあるべし

○五尺三尺の狭セバき路次ロジを限り遮隔シヤカクする所の防火

幕カ三枚重糸ヒを被覆ヒフクし火勢劇ゲキきをより鎮火水

を左右より洒ソクぎかくべし決ケツして焼抜シヤクる憂ウレヒあり

○木戸キドの扉ヒラを早く折ウチ破クサれし若トシし掛カけ

し時を第十二番の長家切抜キリズキの法ホウを参考サンカウして

防火幕ヒカカより被覆ヒフクし

○忍シノ小返コガエし暖ノヒ戸ド掛カきを折ウチ破クサれしを掛カけし屋根

招牌^{カンバシ}拍干^{モホシ}火の見^ミ寄^マを^ヲ佛^{ブツ}小^コ置^ヰて^テ被^ヒ覆^フを^シて^テ板^{イタ}塀^ベ垣^ケ
根^ネ等^ト五^イ拵^ヰ小^コ籠^{カゴ}を^ヲ佛^{ブツ}包^ツむ^ツて^テ

○烈風^{カサレモ}猛火^{イタ}の風^{カサレモ}下^シり^テ板^{イタ}屋^ヤ根^ネ庇^ヒ雪^{ユキ}強^{ツヨク}芥^{カイ}猫^{ネコ}を^ヲ外^{ソト}
総^{スベ}て^ト飛^{トビ}火^ヒの恐^{オソク}を^ヲある^ル処^{トコロ}も^モ防^ブ火^カ幕^{マク}と^シて^テ一^{ヒト}枚^{マダ}通^トり

被^ヒ覆^フを^シて^テ竹^{チク}木^{ボク}並^{ナミ}炭^{スミ}薪^キの高^{タカ}積^{ツミ}等^トも^モ勿^{ナク}論^ロ町^{チヨウ}並^{ナミ}の如^{ごと}く
一^{ヒト}系^{ケイ}小^コ被^ヒ覆^フを^シて^テ

○市中^{ハシチウ}橋^{ハシ}類^{ルイ}焼^{ヤク}の恐^{オソク}を^ヲある^ル處^{トコロ}も^モ橋^{ハシ}番^{バン}の役^{ヤク}と^シて^テ
被^ヒ覆^フを^シて^テ諸^{シヨ}人^{ジン}通^{ツウ}路^ロ小^コ差^サま^マを^ヲあ^ク怪^ケ我^ガ道^{ダウ}の患^{ウヰ}を^ヲ

○塗^{ヌリ}家^ヤ土^ド藏^{ゾウ}も^モ壁^{カベ}心^{ココロ}に^ニ類^{ルイ}焼^{ヤク}の恐^{オソク}を^ヲあ^クり^テハ^ハ茅^チ
四^シ茅^チ六^{ロク}の如^{ごと}く^ニ被^ヒ覆^フを^シて^テ

○右^{ミダ}の如^{ごと}く^ニ悉^{シツク}被^ヒ覆^フを^シる^ル時^{トキ}も^モ軒^{ノキ}端^ハ屋^ヤ根^ネ裏^{ウラ}小^コ間^マ戸^ド
床^{ユカ}下^{シタ}苦^クト^ト吹^{フキ}入^{イル}燃^{モエ}走^{ハシ}る^ルの患^{ウヰ}を^ヲあ^ク飛^{トビ}火^ヒも^モ燃^{モエ}立^タ恐^{オソク}を^ヲ

も^モあ^ク人^{ヒト}々^々家^カ具^グを^ヲ持^{モチ}運^{ハコ}ぶ^ツ逃^{ニケ}出^ダふ^ツも^モ及^ヲぶ^ツ病^{ヤマイ}者^{モノ}盲^{メクラ}
人^{ヒト}小^コ兒^ガ老^{ラウ}人^{ジン}等^ト蹈^{フミ}倒^{タラ}き^テ様^{ヨウ}の按^{オシ}思^シも^モあ^ク諸^{シヨ}人^{ジン}安^ア堵^ドと^シて^テ

心^{ココロ}を^ヲ静^{シヅ}め^テ手^テ順^{ジュン}よく^ク遮^{シヤ}隔^{カク}防^{ボウ}消^{シヨウ}する^ルが^ガ故^{ユヰ}小^コ人^{ヒト}夫^{ツブ}も^モ餘^{ヨリ}
も^モあ^ク速^{スイ}小^コ行^{キョウ}届^{トド}く^ツて^テ又^{マタ}防^{ボウ}火^カ幕^{マク}二^ニ枚^{マダ}重^{オモ}祢^ネ小^コ被^ヒ覆^フ

ある時を聊々烟氣の徹する事なく其蔭よく如何様の働も心の欲する儘ある處

○地主地備家持の分も右の防具各々用意す猶其上一いりは組の火消方も組よく凡る口三十間を被覆する程の防具を用意して市中出火の最手早小持ある時と如何ある劇風猛烈の火勢よくも火尖を為つむと欲する事よく必火遮隔防消一防火の功を敵に半莫大あるべし又如何ある猛火よくも

火猶人夫小怪家人焼死等更小かく勞少くして功を立する半と大し殊小大切の

御場不と遮隔防消せんよ殊更必要の法則と云

○防火幕ハ地主家持いりは絶を外方各町要花を家の戸と記し並に隣家隣町持寄の良丸遠あき松小せんが為し

○防火幕ハ不用小の時を流水小浸しを半一晝

夜^ヤうて猶^ナ水中^ス小^コひり^リ多^タ足^ミく^ク踏^フま^マばも^モ苦^ニ汐^シ汁^{ジュ}の
 旨^ミ悉^シく^ク抜^ネ去^セて^テ後^ノ太陽^タ晴^ハ日^ニ小^コ乾^カ一^ト元^ノの^ノ如^クく^ク野^ノ
 か^カ〜[〜]夕^セ夜^ヤ抜^ネぎ^ギる^ル時^トも^モ雨^ウ天^{テン}の^ノ旨^ミ濕^シり^リを^ヲ引^ヒき^キ思^フ
 ち^チ朽^ク腐^フ小^コ虫^ム〜[〜]

防火策圖解 畢

附録

地震劇風災害豫防法圖説

宇宙^ウの間^ノ災^ハ害^ハ一^トく^クて^テ止^ム以^テ地^ノ震^ハ亦^モ一^ト小^ノ居^ルを^モそ
 微^ビ小^ノある^ルも^モ聊^シ々^々恐^スる^ル小^ノ足^リ〜[〜]以^テと^ト維^キ劇^ハ烈^シある^ルに
 至^リて^テハ^ハ屋^ノ舎^ヲを^ヲ壊^スち^チ人^ノ命^ヲを^ヲ傷^ムて^テ是^レ小^ノ危^ハが^ガ小^ノ必^ズ火^ヲを
 以^テ以^テ災^ハ害^ハ小^ノ天^ノ地^ノ間^ノの^ノ一^ト大^ノ災^ハを^ヲ免^ルる^ルも^モ人^ノ々^々徳^ヲドめ
 々^々後^ノ劇^ハの^ノ前^ニ兆^ヲを^ヲ知^ルる^ル者^ハ數^ニ〜[〜]西^ノ洋^ノ人^ノの^ノ説^ハ小^ノ地^ノ震
 の^ノ全^ク人^ノと^トも^モる^ルの^ノ時^ト小^ノ當^ルく^ク磁^ノ石^ノの^ノ吸^ク收^ク力^ヲを^ヲ脱^ス〜[〜]

防火策圖解

畢

由を説き因て疾着を吸付させ時計の如き目ざ
 まりの仕掛を以て試むる時地震の前兆を知る
 小足る由ある時も將小地震の登せんとするの時刻
 小至く知るのときを緩劇もいひて進出はし
 暇もあけざる則竹の蓋のゆるんや又地震の三十
 日前より井中の水き泡立由あれども未だ暇と試
 験する事非んば又井水俄小地震を登る由
 あれども是亦を場ふよりあはざる事唯大

地震既ニ発する時ハ井水の増湧するハ實事ある
 其前兆を知る小足り又將小大地震を登ると
 する少く前小兩氣を帯く一系小曇り密雲りて雨
 降ざる時必以劇烈の地震ある由あれども其雲
 りるも否や行程を由あれども是亦を時小雷
 て知ると云ふの事よく震災豫脱の爲に解あり
 づるは其外易人相墨色脚電世なる事昔いづるも
 空論なりて多し小足るべきものや九そ劇風大雨大

雷猛烈の地震等ハ實小天地無窮の變動あるをバ
 人智を以て其前兆を了知する事有りしを以て
 其の時劇烈の地震大なり〜竜巻等の変災を
 豫防する緊要の術も他あり唯土蔵居宅の造作
 格外堅固小きるに多るのを以て小大地震も元來を
 罕あるものより百年二百年小なり〜唯火
 災の〜年々屢々のあり〜不時小發するがれば
 人々家作小永久を謀らんと徒小寒暑兩變を待たず

土の半小思ひ土蔵も火災を防ぐと云ふ事足らざると
 心得ありて東都板を家宅の建方を粗畧あり殊更
 時々の火災小諸職人の作料諸材木の直貯累年高
 價小きむら敷小列侯の富と雜音諸經營を精細と
 盡きざる事あり〜市中の商家小至小の貧富も
 爰小心を用ひ冷凡の足務り一坪竹拾ふと定免或も
 入札小敷〜下直の方ト落札〜投小敷〜積負善積
 小きる半世上の風習ありは至職人も亦早業を志す

一として大なる穴小細き穴ぞをきりて諸材木も是
 小准極く下直の粗材を用ひ徒小奸利を専らに
 する事友脱小當八月廿五日の大風より新規建の
 家作も夥しく吹倒るれ傷死怪人救多あり中
 茲負普世の奨習とありしも建地職人の堅意
 小製造する事を手馴れ或も更し心得ざる職人も
 有るある小人を職人小委任して唯下直小揚せ
 専らするが故小右等の地倉大風の変災を脱る

る事りし中より管委小経営せむと欲するれども作
 料諸材の高價小恐を止事を得て任來の粗工小
 委任するも多しある事天地の氣化積年の久し
 自然地中小石炭火脈漸く溜徹し何時小必何様
 ある劇甚の天変を發するやも初る處りしは殊小
 近年ハ諸必とも屢く大地震ありて五年七年の
 久しきをまゝるが今明年の内にも再發せんと定
 め給ふあるを安坐して粗末小住するも危し事

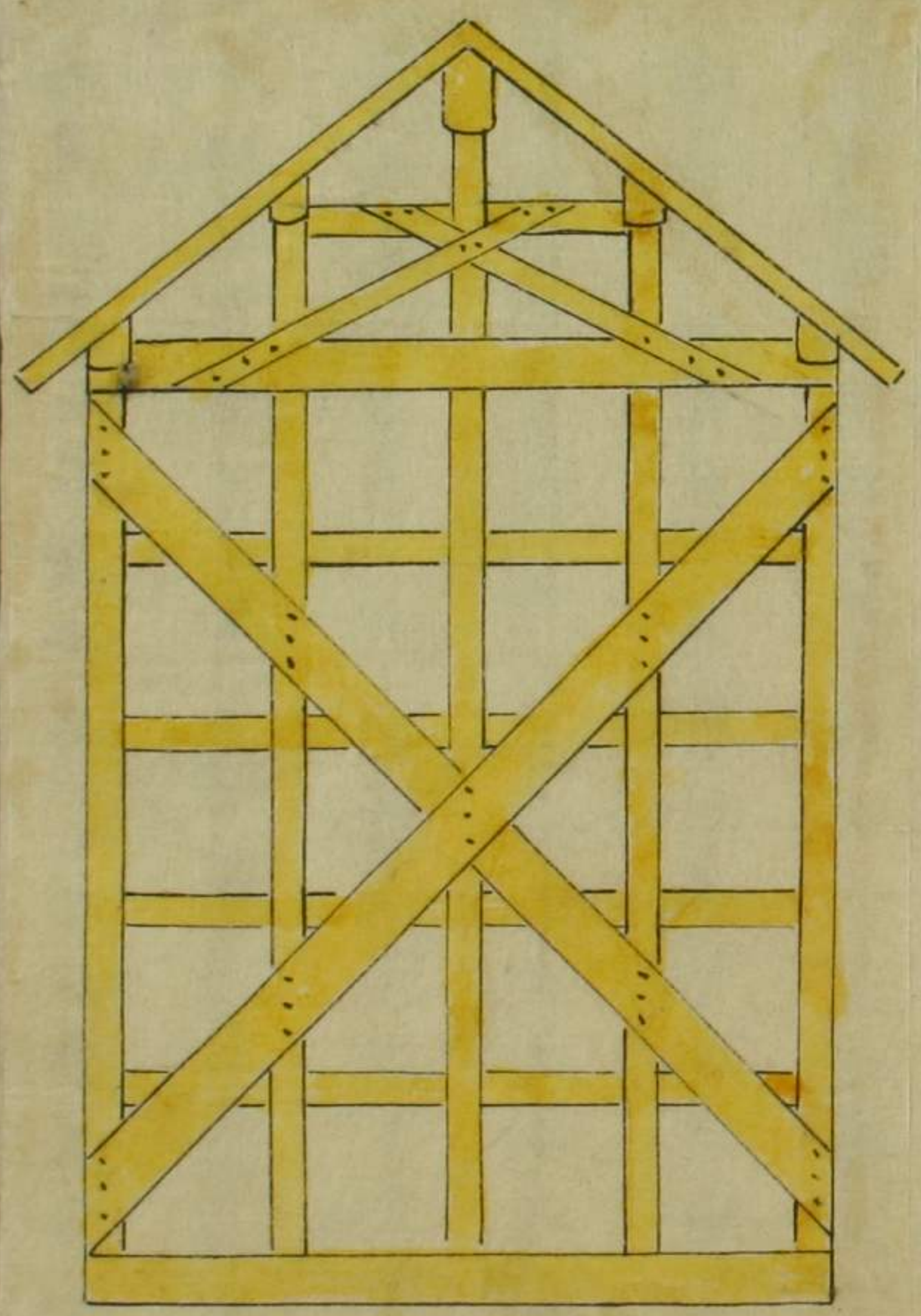
實小大砲の的テキセン前小立巖牆の下小卧モト次がゆる將又
 日ヒ月ツキ不時マドクの小地震クシキも其劇易ケイイの程ホト合イも知チ色
 ざれも微細ビサイの震動シンドウも驚懼キウクして平ヘイ老安心シヤウアンシンなるべし
 予是小於コ地震劇風クシキフウの大災オホサイを豫防ヨボウするの手段シユカンを
 工夫クワフして諸人と俱トモ小コ洪福コウフクを同トウじと欲ホト然シカまども
 繁工大費ハンクダイヒの仕法シホウよくも或も力チカラの及ヲびざるも何ナニも
 故小予ココが如ゴト極貧ゴクビンの者モノも力チカラを成ナし易ヤスく予が年
 未實驗ミジケンするまじうして用費イリヒ至輕堅シキケンなる半盤石ハンパンシタの

如ヨウ要法ヨウホウを各解カクりて防火策ホクシヤクの後小附録コトク以下
 世小播セコハ次覽者ミルモノ宜ヨロしく熟考ジュカウを一と云
 ○家作并土蔵建地タカラを格カク外ガイ出デる小為コナきんと破ヤく
 小家小大材コケを用ヨウひ或も不スぞ貫スきスのき一口ク嚴重シヤウジュウ小
 製造セイゾウせんともるに諸材シヨサイ工料コウリョウ莫大モクダイりて自力ジリキ小不コ及ヲ
 人も多オホく一又大柱良材オホキナリヨウサイを撰セり用ヨウゆるとも中ナカニハ
 職人小於シヤクジンコ於コ啖タン茶小製作コテウサクする事コトを心得ココロエざるものも
 多オホくある時トキも益エキの相入ソウイを勞ロウひの一故小先建コトキ

附入

地を仕来りの通入札普詰りて成丈下座小製
 造し壁を附く後小見を堅きとて仕法ハ即
 ち土蔵の同じ土戸の骨を製造するが如き心細く
 厚一寸幅八寸の板割を以て家の左右前後上下
 とも各柱小腕と切込左の骨の如く筋違十文字
 形小密くお込三百目以上の大釘を以て柱母小
 各之中に嚴重小お附りて此も時々二階建
 尾葺りとも堅きある半磐石の如く何れ劇

第一圖



甚の地震猛劣の大風も聊うぬぐも曲るの憂か
 荒増左の骨を以て了知く

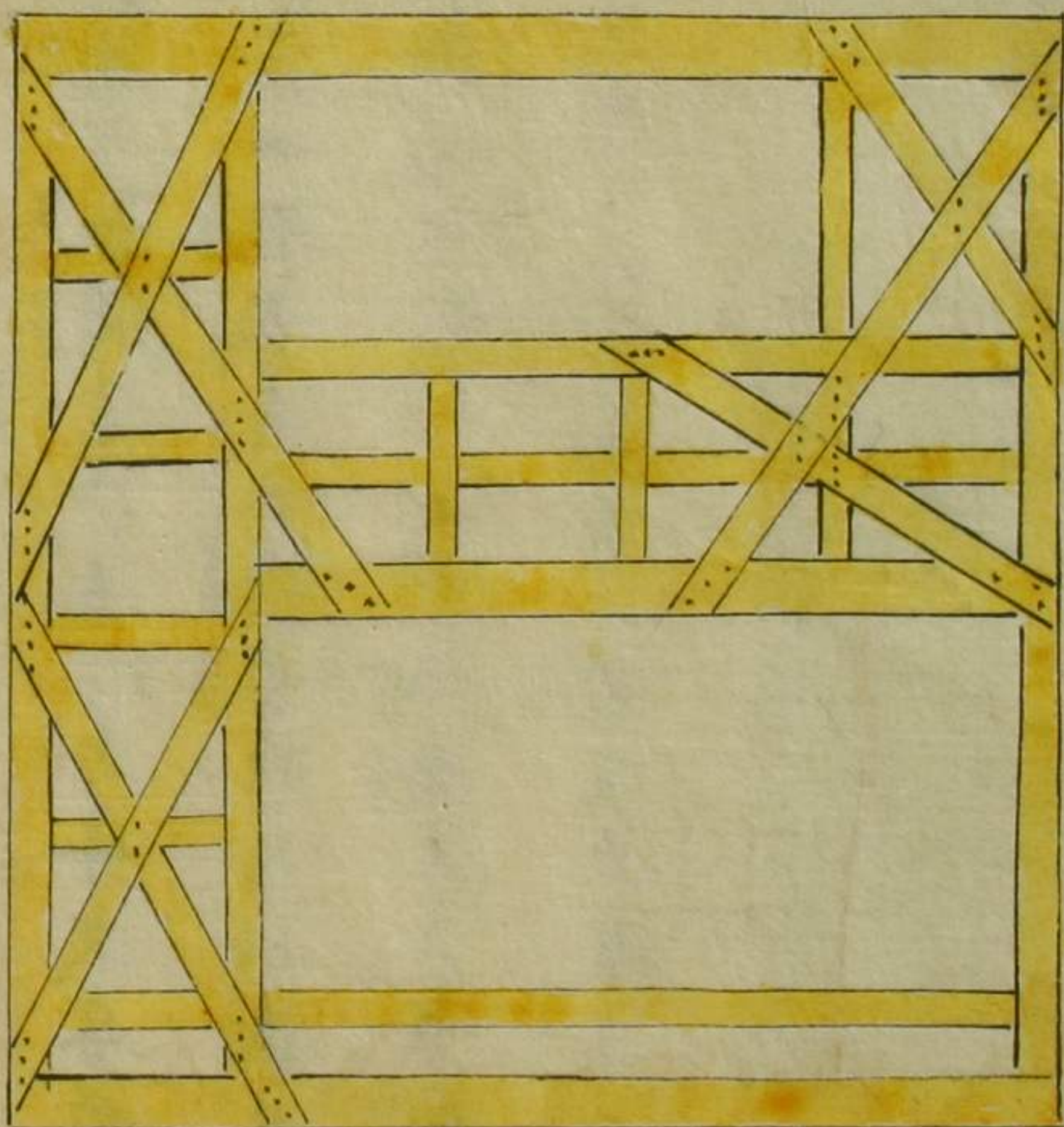
方火策圖解

至

右々二階建の家左右横平あるこ下小筋遠スレサヒテ不十
 文字形小切込付ウチる界サカイ前後左右大壁オホカベ並ナラぶこ
 を附ツケべきまを竹タケ方も也此筋遠スレサヒを付ツケる上面小
 あるこを付ツケ附ツケ了マツル又マタ其場シバ不フ小コ界サカイり外面ウチより筋遠
 付ツケる事ありハ内面ウチより切込付ウチる上面を板
 敷イタりオホ筋サカイのモヨウ様ヨウにヨリ考カウふコト
 ○町並表チヨウナミる口も筋遠スレサヒを付ツケるまをありがゆレ然
 どもも二階建ありハ鴨居カモヅの上と二階ニカウる戸ドの敷イ

間マ々十文字形小切込付ウチる若平ワヒラ家ありハ鴨
 井イの上ウより地廻りヂマヅリの棚ケタの上ウに十文字形小切
 込ウチる若モシ左右小壁カベ或ナ戸袋トアゴ書カキりハバ必カナラ十文
 字形小筋遠切込付ウチる是亦外面ウチより付ツケる事不
 知チ

第二号

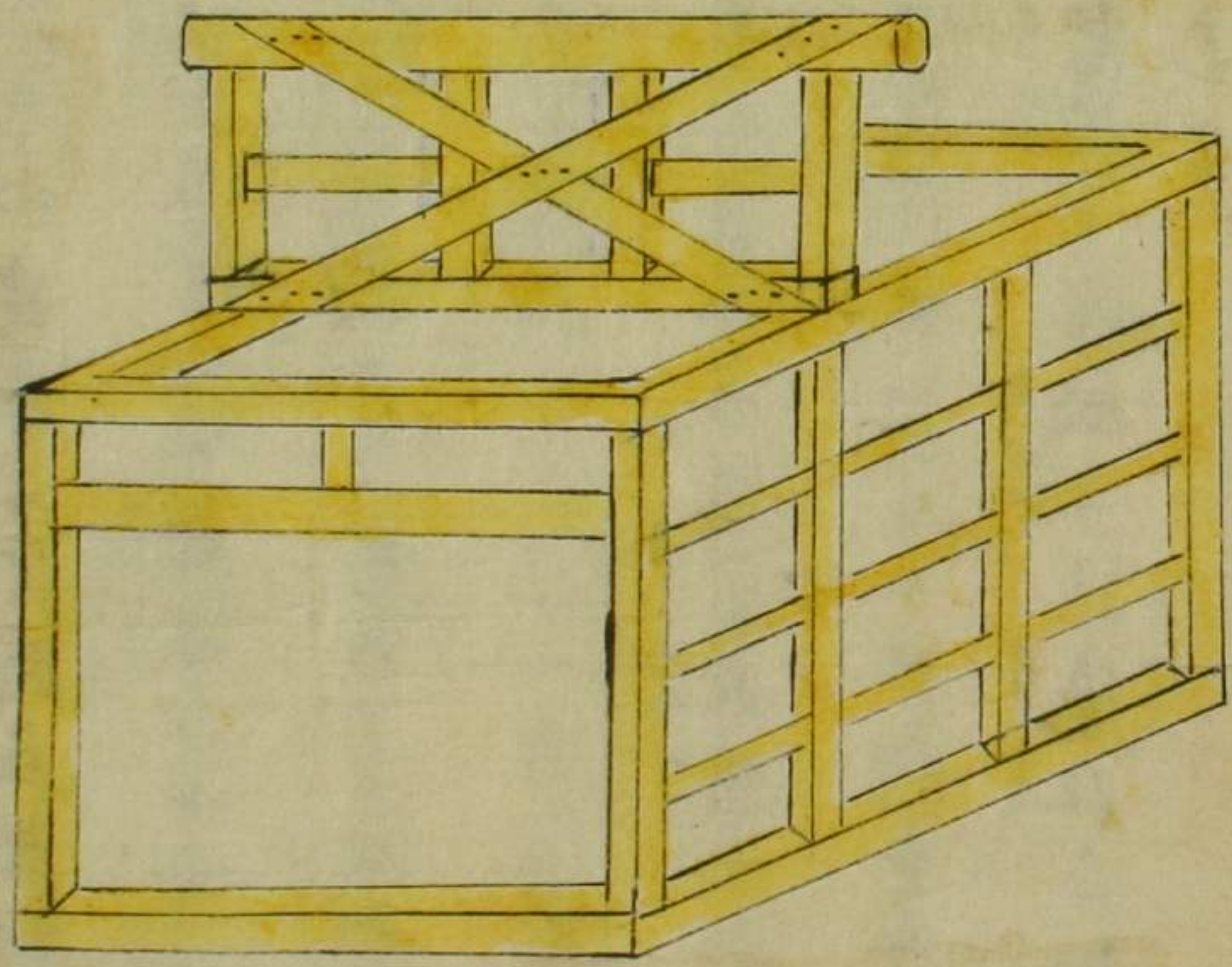


右を^{トア}表^{ハシ}口^{カド}二^ニ尺^シ半^ハの^ノ二^ニ階^カ建^テて^テ表^{オモテ}柱^{バシ}三^{サン}本^{ポン}建^テ三^{サン}尺^シ
 の^ノ戸^{カド}袋^{フクロ}を^ヲ附^{ツケ}間^マ口^{カド}二^ニ尺^シ半^ハの^ノ要^{ヒト}柱^{バシ}等^{ナリ}して^テ二^ニ階^カを^ヲ左^{ヒダリ}右^{ミダリ}小^コ戸^{カド}
 袋^{フクロ}を^ヲ附^{ツケ}戸^{カド}九^ク尺^シ半^ハの^ノ建^テ家^{イエ}小^コ筋^{スジ}遠^{トホ}を^ヲ切^キ过^スて^テ付^ケ附^ツ
 け^テ着^キ庇^ヒを^ヲ附^{ツケ}る^ルも^モ筋^{スジ}遠^{トホ}と^ヲ附^ツけ^テ後^{ノチ}
 二^ニ階^カ附^ツ戸^{カド}下^ノ筋^{スジ}遠^{トホ}外^{ソト}面^{オモテ}より^テ付^ツき^テ又^{マタ}裏^{ウラ}口^{カド}を^ヲ横^{ヨコ}手^テ寄^ヨり^テも^モ出^デ入^イの^ノ口^{カド}
 内^{ウチ}面^{オモテ}より^テ付^ツき^テ又^{マタ}裏^{ウラ}口^{カド}を^ヲ横^{ヨコ}手^テ寄^ヨり^テも^モ出^デ入^イの^ノ口^{カド}
 小^コ戸^{カド}あ^リる^ル時^{トキ}も^モ皆^{みな}此^{こゝ}を^ヲ照^スら^フ考^{カガ}へ^テ付^ツき^テ又^{マタ}坐^イ敷^{シキ}
 中^{ナカ}仕^シ切^キの^ノ壁^{カベ}あ^リる^ル時^{トキ}も^モ是^{こゝ}亦^{また}此^{こゝ}を^ヲ小^コ俵^{ハシ}十^{ジュウ}文^{モン}字^ジ取^テ

打屋〜凡筋透を打てる中より外面ありハあること
か〜内面ありバ板をめぐりて覆ひがくま〜

○凡棟木の下と梁の上と塚柱を建横貫と差を
たる半竹方も同じ造り方ありども尾葺松〜
列〜重荷あれども大地震の危〜故小
左の骨の如く塚柱と腰切筋透を打附〜

第三号



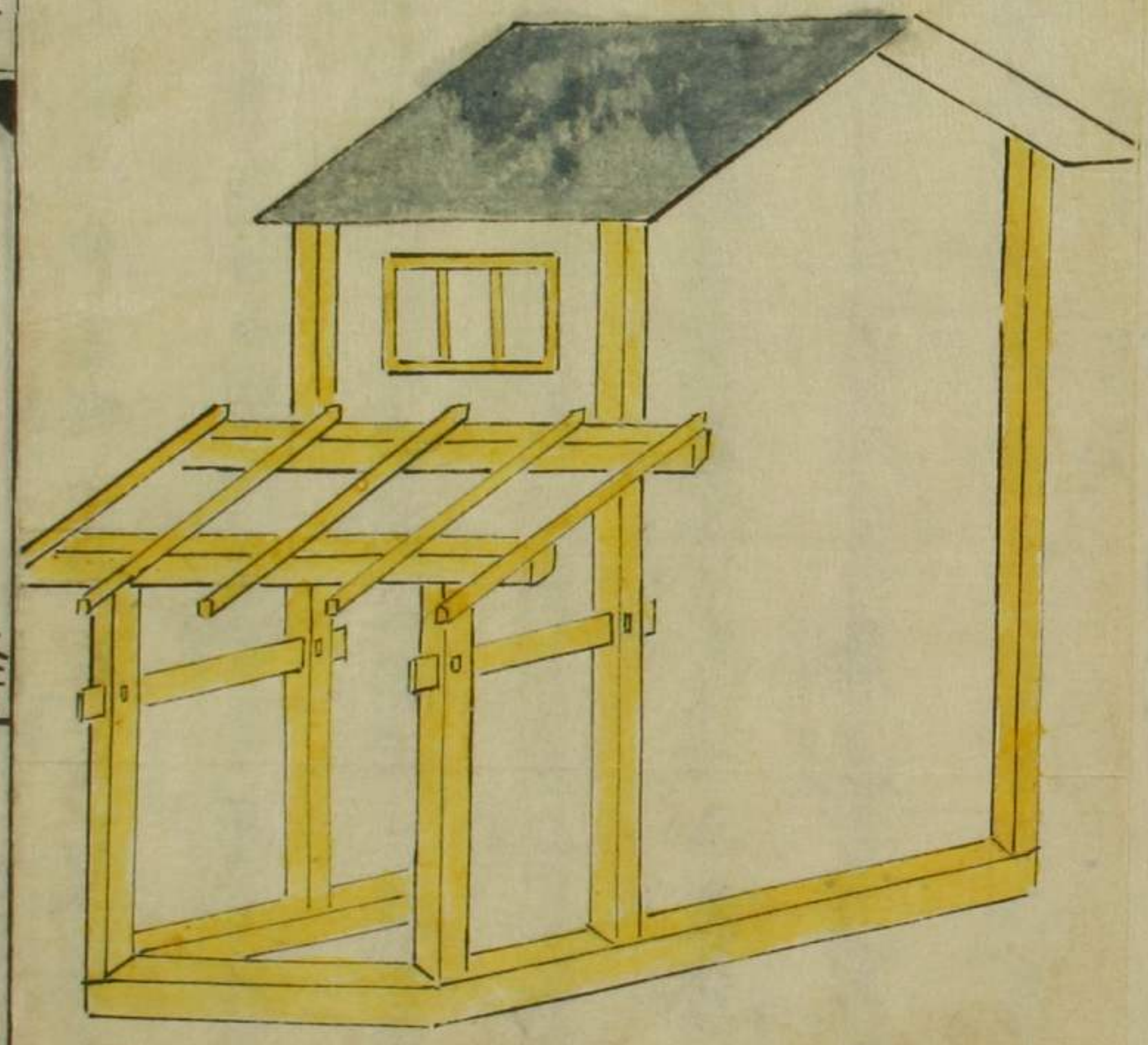
右系と間口九尺の建家より尾屋根地棟下と梁
上の塚柱に切込十文字形の筋道を敷く等し
長敷建より長り十百二十百是ありとも此系小使小
敷蓋所筋道を敷く

○凡市中町並の家作者家書表裏とも必庇を因
てその庇の瓦附方を懸架する小竹まもを粗畧し
江戸町並の習俗より正戸の表柱小切掛あり
大貫を横小押付六寸行より敷附此大貫と庇

の桁より垂木を敷く一六寸行を以て大貫と桁
より一本づつ敷附垂木の引張よりせぬの
より竹方も同様職人も亦右を通りより為りの心
居るやより猶より上小庇と尾より葺格外の重荷を
持しむるもあり敷小去外十月二日夜の大地震小茅
一垂木掛の大貫を引張り正戸と庇と引張尾の
重荷を以て敷く進出江戸口より敷く或
も往來より敷く類は皆入札番詰職人任小

して欲^ウきま^ル水^ノ手^ヲを^テ振^ルあ^らぶ粗^ソ畧^リあるより起^ルる事
 ありて實^ニ小^シ款^トし^て次^ニ方^ヲと^りて固^ク此^ノゆ^ゝ大
 害^ヲを脱^スむ^る事^ハ、^ハ表^ノ家^ノの柱^トと庇^ノの柱^トを繋^グ
 差^ト通^ス左^ノの梁^ノのゆ^ゝあ柱^トをせんを^テ正^ニ庇^ト
 を繋^グぶ^る事^ハ、^ハ此^ノ費^ヲを^テ省^スる^事ハ、^ハ竹^ノ筋^ノの費^ヲを
 中^ノ聊^クの賃^ヲ浪^スしく^て大^ニ災^ヲを脱^スる^事ハ、^ハ製^ノ造^ノの法^ヲを
 以^テ考^フぐ

第四号



右の等ハ正戸の柱と庇の柱と貫を差徹くおせん
 さお込庇のこしれざる指小手塔く繋ぎあはるる等こ
 こハ長サ十尺二十尺の長屋建の庇もくも尺口二
 尺或も三尺の等しく敷く不ぬ此繋ぐ時とぬ竹
 ある劇烈の大地震大嵐竜巻もくも破壊崩墜の
 患決りてあつゝは尤庇も筋道を丁切おきあつゝ六
 二夫しく切込お附屋

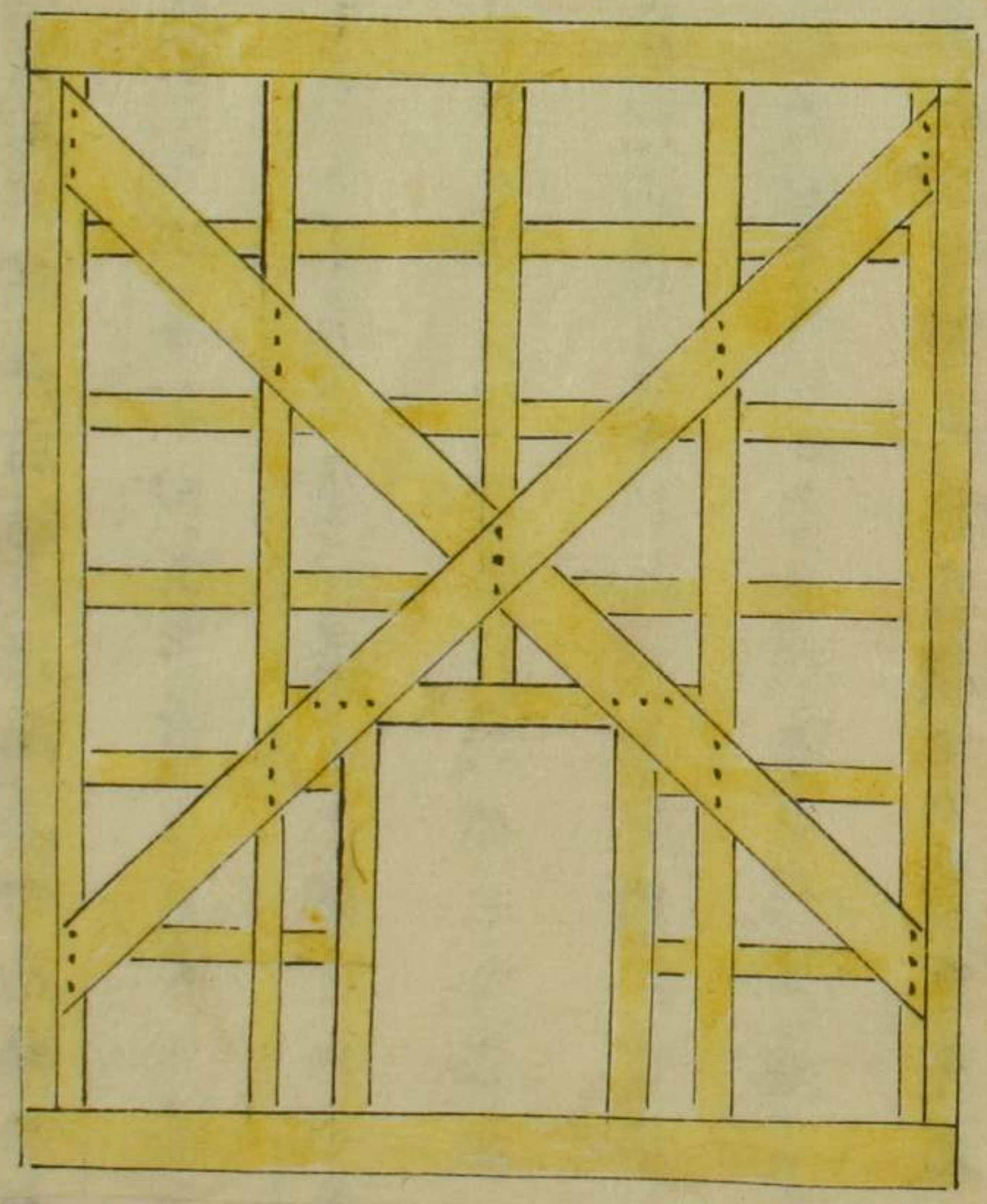
○元土蔵の建方も何方も同指六七寸角の筋性

よき大材を柱とあつゝ内面も柱貫とも小絶をうけ
 壁も白土小きる事一世の習俗へあまとも是唯虚美
 ありて地震火災の凌りぬ聊もあるべうは無益の
 費と云べし故小此の土蔵も去年の大地震よ
 り悉く破壊して味屋の為りぬ更小成程く地震後
 の火災より悉く類焼せし固く予り作法を柱貫決
 りて良材高價の亦を不用節多の檜の悪木もく
 四六五六角等の丸材を切りぬ絶書をうけは小

用ひて外面ウチシヨ小前コサエの切キりも浅アサく〜唯ヨスミ四隅ヨスミの柱チウを
 八寸角カクを用ヨゆまども見ミ亦ナ新アラタお斗ウチり〜カチ絶ツツをうけ
 唯カク内面ウチの角カク二寸ニ徑キリ切キり〜サき〜ウき〜ハ口クチ咎トガを
 小造ツク〜んンとすれレ〜モ大オホ貫クワン小コ堪タマ込コ矢ヤ張ハ入イ孔アナ普フ轉テン小
 〜モ左サの骨ホネの如ニく内面ウチ小筋コスジ遠トホ十字ジュウジ筋スジ小コお〜ハ筋
 遠トホハ一尺角イツシヤクの檜ヒノ本ホン長ナガ多タきキ悪アク本ホンを厚アタリ一寸イツセンの板イタ小コ挽ヒキ
 割ワ長ナガ短ミダ適テキ宜ギ小コ切キりホド熱ネ在シ小コ深フカリ一寸イツセンづツ切キ込コ堅ツルを小
 お込オコ三サン百ヒャク目メ以上イジョウの大オホ釘ナギ一イツ柱チウ小コ三サン本ホンづツお込オコ〜

其仕法左の骨を以て考カシガ〜

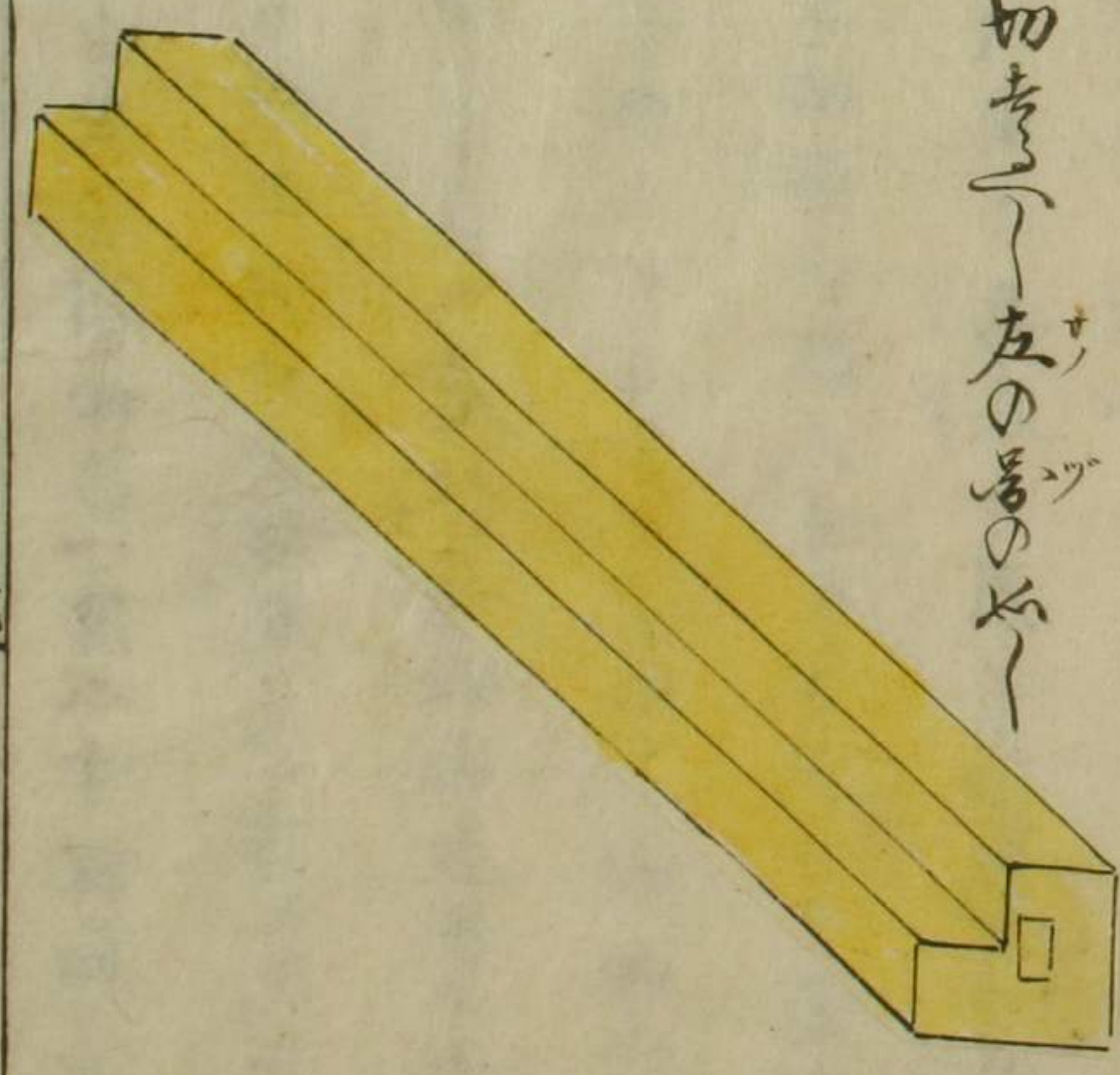
第 五 圖



右の寄と二尺の土蔵戸前口の内面ト三寸一尺幅の板
 割とく筋遣を入柱毎小切込打付する寄と丸入
 札普請とく至く下直の廉材ソオイダボ悪本を柱とあり絶ト
 削もせざれば大工手写も多うう然道とも内面四
 方とも十字形の筋遣を寄の如く打込時ハ骨組ホ子グミ
 の寄を向るや大磐石ダイバンシヤクの如く如何ある大地震もくも
 動揺ドウリョウせざるが故小を壁毛モウハシ髪も損シざるを要あり故小
 烈風大火も頼焼の恐もあり予り親友シニイラ此コノうく

去卯年の大地震よ土蔵を完全カンゼンをもるをえんを
 ○予り製造法セイゾウの土蔵ハ四隅ヨソミの柱斗りハ八寸角を以て
 其内面の角二寸程切き一左の寄の如く

第六号

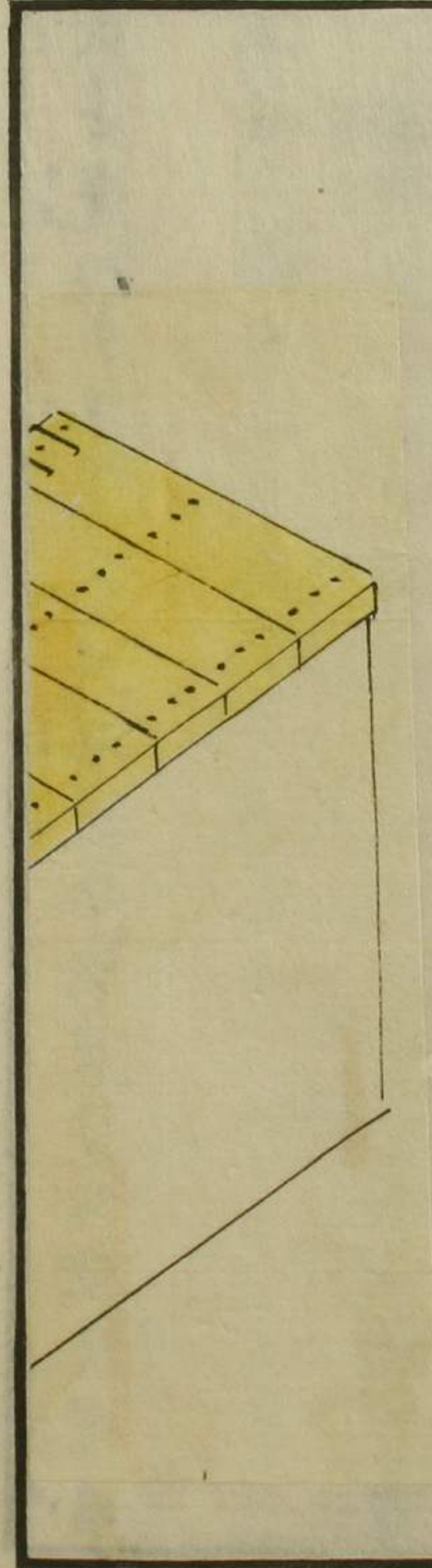


右巻ハ第五巻の土蔵戸前口内面小十字形の筋遠スビ
 を打てるもの小又厚アツ一寸の板割イタを以て横小打附ヨコ
 る等此板割も表面を鈍削ヌブりて三百目の大釘
 を以て柱毎小二本打附桁ケタシタや柱ハシに板割一板丈の
 重なり通しトシの板を以て小板コイタを此口より壁と板
 との間に施シる等荒川砂アラカサの太陽晒用タビ小乾コカし
 のを隙スキマを以て投入トウし板を以て押しオシめ
 及び並ナべし此小なる時トキ米穀イネを移入ワるも壁小カ筋スビ

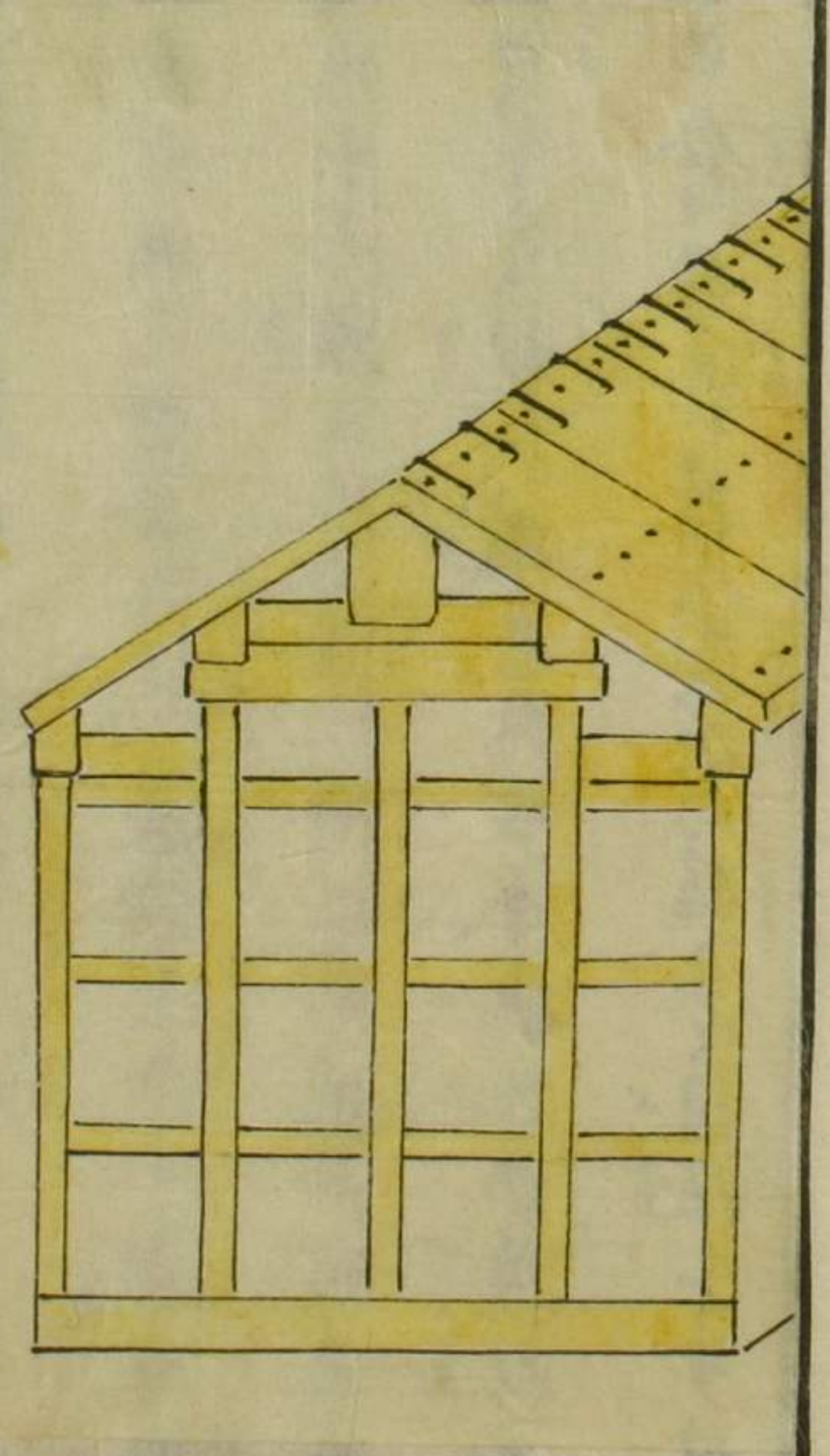
穴アナを穿ウつガの憂ウレおク又猛烈モウの火災カも以て害ガイ
 あり
 ○通例ツウレイの土蔵ツツの屋根ヤも地棟ヂ小合掌木ガウサウキを敷シき
 ぐせグセ上小棟ウヘ檼ノもや垂タ木キ等残ノコらば鈍削ヌブりて縦タテ
 横ヨコ小念コネ入イ込ミ建タ尾ビ北キの小屋コヤ紙シを敷シき多くオホクを上ウヘ
 廣板ヒロイタを以て横小打附ヨコ柿カし土居ド葺フキも半竹イタ方カタ
 も同様ドウガウも職人シヤクジン作料サクリョウの嵩カサを以て聊シヤウ等トウの
 害ガイ小云蓋コクモの雜費ザツヒ也予が工夫コウフも無益ムシキの費ヒおク儉ケン

約茅一ヤク一クて格外堅固小製作するを専要センヨウとせし
 致小棟桁合チダダケガフシラギ木もや垂木タレキ等も一切是を用ひば
 松檜木マツノキヒノキの脊板セイタの厚さを以て地棟ヂムキと地廻りの桁ケダ
 小船釘フナクキの大ききとす附る半一左の等の如し

第八号



右等の如く造らんと欲せし先づ板の長サ六尺は是バ
 厚サ二寸以上と長サ九尺あるを原サ三寸以上と
 餘も是小准ジシ内面ウチウラの板割イタリを扱割ヒキワする時右の心切



多く脊板を用意を^{ツクイ}て^{シカ}為して^{ウチヲ}内面と^不合目を
 能^{ヨク}削り^不合せ^子船^子打^{テキギ}の^{ホトヨク}適宜^{ホトヨク}小^{ホトヨク}大^{ホトヨク}ある^{ホトヨク}よ^{ホトヨク}ふ^{ホトヨク}て^{ホトヨク}地^{ホトヨク}棟^{ホトヨク}と^{ホトヨク}地^{ホトヨク}廻^{ホトヨク}りの
 折^{ホトヨク}と^{ホトヨク}中^{ホトヨク}程^{ホトヨク}の^{ホトヨク}梁^{ホトヨク}と^{ホトヨク}三^{ホトヨク}本^{ホトヨク}取^{ホトヨク}り^{ホトヨク}て^{ホトヨク}一^{ホトヨク}本^{ホトヨク}三^{ホトヨク}本^{ホトヨク}先^{ホトヨク}步^{ホトヨク}附^{ホトヨク}棟^{ホトヨク}上
 前後の^{ホトヨク}板^{ホトヨク}の^{ホトヨク}小^{ホトヨク}口^{ホトヨク}と^{ホトヨク}大^{ホトヨク}鋸^{ホトヨク}二^{ホトヨク}批^{ホトヨク}先^{ホトヨク}打^{ホトヨク}込^{ホトヨク}繫^{ホトヨク}く^{ホトヨク}べ^{ホトヨク}大^{ホトヨク}工
 作^{ホトヨク}料^{ホトヨク}の^{ホトヨク}費^{ホトヨク}少^{ホトヨク}く^{ホトヨク}至^{ホトヨク}て^{ホトヨク}皆^{ホトヨク}去^{ホトヨク}り^{ホトヨク}て^{ホトヨク}屋^{ホトヨク}根^{ホトヨク}上^{ホトヨク}より^{ホトヨク}盜^{ホトヨク}賊^{ホトヨク}の
 入^{ホトヨク}り^{ホトヨク}を^{ホトヨク}憂^{ホトヨク}も^{ホトヨク}か^{ホトヨク}く^{ホトヨク}氣^{ホトヨク}も^{ホトヨク}入^{ホトヨク}る^{ホトヨク}事^{ホトヨク}あ^{ホトヨク}ら^{ホトヨク}ず^{ホトヨク}火^{ホトヨク}災^{ホトヨク}居^{ホトヨク}火^{ホトヨク}災^{ホトヨク}必^{ホトヨク}
 何^{ホトヨク}程^{ホトヨク}劇^{ホトヨク}烈^{ホトヨク}あ^{ホトヨク}り^{ホトヨク}とも^{ホトヨク}焼^{ホトヨク}火^{ホトヨク}破^{ホトヨク}ま^{ホトヨク}火^{ホトヨク}古^{ホトヨク}今^{ホトヨク}無^{ホトヨク}比^{ホトヨク}の^{ホトヨク}造^{ホトヨク}法^{ホトヨク}也^{ホトヨク}
 又^{ホトヨク}そ^{ホトヨク}脊^{ホトヨク}板^{ホトヨク}の^{ホトヨク}合^{ホトヨク}目^{ホトヨク}より^{ホトヨク}板^{ホトヨク}の^{ホトヨク}六^{ホトヨク}分^{ホトヨク}板^{ホトヨク}より^{ホトヨク}目^{ホトヨク}板^{ホトヨク}と^{ホトヨク}步^{ホトヨク}附^{ホトヨク}

油^{ホトヨク}石^{ホトヨク}灰^{ホトヨク}より^{ホトヨク}一^{ホトヨク}回^{ホトヨク}塗^{ホトヨク}固^{ホトヨク}り^{ホトヨク}て^{ホトヨク}後^{ホトヨク}通^{ホトヨク}例^{ホトヨク}の^{ホトヨク}通^{ホトヨク}毛^{ホトヨク}を^{ホトヨク}揚^{ホトヨク}ぐ^{ホトヨク}
 ○屋^{ホトヨク}上^{ホトヨク}瓦^{ホトヨク}葺^{ホトヨク}小^{ホトヨク}あ^{ホトヨク}ら^{ホトヨク}半^{ホトヨク}一^{ホトヨク}元^{ホトヨク}来^{ホトヨク}火^{ホトヨク}災^{ホトヨク}を^{ホトヨク}防^{ホトヨク}ぐ^{ホトヨク}が^{ホトヨク}為^{ホトヨク}り^{ホトヨク}也^{ホトヨク}
 手^{ホトヨク}棟^{ホトヨク}の^{ホトヨク}左^{ホトヨク}右^{ホトヨク}小^{ホトヨク}大^{ホトヨク}ある^{ホトヨク}鬼^{ホトヨク}板^{ホトヨク}を^{ホトヨク}附^{ホトヨク}棟^{ホトヨク}を^{ホトヨク}高^{ホトヨク}く^{ホトヨク}地^{ホトヨク}上^{ホトヨク}と^{ホトヨク}步^{ホトヨク}
 或^{ホトヨク}も^{ホトヨク}箱^{ホトヨク}棟^{ホトヨク}小^{ホトヨク}も^{ホトヨク}も^{ホトヨク}も^{ホトヨク}も^{ホトヨク}益^{ホトヨク}の^{ホトヨク}虚^{ホトヨク}美^{ホトヨク}徒^{ホトヨク}小^{ホトヨク}外^{ホトヨク}見^{ホトヨク}を^{ホトヨク}飾^{ホトヨク}
 る^{ホトヨク}の^{ホトヨク}こ^{ホトヨク}り^{ホトヨク}て^{ホトヨク}地^{ホトヨク}震^{ホトヨク}火^{ホトヨク}災^{ホトヨク}より^{ホトヨク}大^{ホトヨク}小^{ホトヨク}害^{ホトヨク}あ^{ホトヨク}る^{ホトヨク}頗^{ホトヨク}る^{ホトヨク}瓦^{ホトヨク}葺^{ホトヨク}の^{ホトヨク}
 本^{ホトヨク}意^{ホトヨク}を^{ホトヨク}失^{ホトヨク}ふ^{ホトヨク}小^{ホトヨク}ぶ^{ホトヨク}と^{ホトヨク}て^{ホトヨク}見^{ホトヨク}小^{ホトヨク}低^{ホトヨク}く^{ホトヨク}然^{ホトヨク}く^{ホトヨク}棟^{ホトヨク}を^{ホトヨク}高^{ホトヨク}く^{ホトヨク}せ^{ホトヨク}火^{ホトヨク}
 災^{ホトヨク}の^{ホトヨク}為^{ホトヨク}小^{ホトヨク}き^{ホトヨク}る^{ホトヨク}時^{ホトヨク}も^{ホトヨク}外^{ホトヨク}見^{ホトヨク}り^{ホトヨク}て^{ホトヨク}も^{ホトヨク}棟^{ホトヨク}小^{ホトヨク}重^{ホトヨク}新^{ホトヨク}あ^{ホトヨク}
 地震^{ホトヨク}風^{ホトヨク}火^{ホトヨク}の^{ホトヨク}患^{ホトヨク}も^{ホトヨク}か^{ホトヨク}く^{ホトヨク}お^{ホトヨク}く^{ホトヨク}也^{ホトヨク}

右等の如く二重三重の石を合せ目分洞形小穿を
穴に鉛を溶いてさして冷固せしむべし其外の石垣
も皆此法を参考して堅固ありしむべし石焼
石の角居も臺石小切込沿うてある時ハ如何
大地震も決して倒る患なし

○地形築礎の致し方をも其土性の剛柔より各々
一様ありし故小穿等の土性を其土の仕来り
堅固よりし尤も内土性至柔の地より深サ四五尺も

堀立捨土臺を投入し其上小角石を建大木を以
て大磬より敷目橋をぬかして莫大の土敷費の可
い此等の場を手に軽く築礎するに地形を二三尺堀
穿ちその中の石の切屑と油石灰の糟を交へて投入し
太一握り程の丸を様の物より長小橋を先猶も宛
投入してハ橋を先敷通る時を至て手軽く投入費
をく其堅固ありし年を積み流る石の井桁の如く
一基小のりまて大磐石の如くありし此仕法を俗

小千本搦と唱へて素人業より手輕さ仕法也

○海濱或も大河の邊りとも大暴風竜巻大津浪等

よて居宅を吹流し屋根を折上り吹流るも或ハ

土倉と柱と引放され破壊する小至り大津浪の

甚しき處土倉と柱と屋根と各別まゝ小あり半

有又家宅傳まされぬが傷死もせまじり小屋舎破壊

するが敷小二階屋上より接ぎりし創り後逆小傷死

小及ぶ敷家半もいも一尤居宅を地蔵縁防の柱小

製造する時を潰れる程の事を決しておぼくはこれと

比建地も土臺の上小載り短少の不足を入る屋上の

地廻りの折上小載る斗りねバ大津浪大暴風より

りありし時を必だ放まじり小ありべし敷小大津浪

大暴風竜巻の恐りる郷里より大鯰を以て土臺

と柱を内外より各二本柱毎小都合四本完備重小

折附繫ぎを又柱と折と屋根具と皆悉く大鯰を

繫ぎをる時大暴風竜巻の災害を脱し能令大

津浪より軒端以上屋根上まで引く時ハ溺死を
脱す小室を造る

○元々大洋津の恐るる海濱おど小便利小の家
作して住居せんと欲すハ前より冬季の津浪の高下を
問糺し土石を集免地敷を平地も四五尺或は六七尺
も高くし土石を積の始小家の留敷を積り
四隅小當る所に長サ三尺の尺石を居四隅とも小石
石ト極太の綱線長サ一丈斗り小切するを九十本

宛のこ付糸を為す洞線を建て地上小引出葉礎
して土臺を居る時四隅とも土臺小かく之暇と糸を
為すは是亦手軽し其費少く何れある大洋津浪
より小家の流を動さ出火の憂なく且大暴風竜巻小
此等あるは尤家の大小は身洞線の増減も多し
此条も西暦年八月廿五日夜の大暴風津浪より海
色も砂付焼く意を以て察す
○大暴風竜巻昔の言ハ必火雨戸を吹たぐり或は
吹破りて屋根裏小風を包み屋倉大小とも空中に

吹揚次落久シタ故小流シタは家性ヤケガ家人ガ者多シく出来シる
也シ元来シ何方シの家居シも敷居シ鴨居シの溝シの深シり僅シ小
曲シ尺二三分シの餘シも無シく戸シぶちハ僅シ一寸角シ小シ尺二
階上下シとも同様シを危シき事シ勿論シ是シを咎シふシせむと
欲シせも兩戸シの上下シ一尺餘シの要シもく戸シ入りシの便利シを
ん中シハ二尺餘シ横シふシまシを入シ戸シ入りシをシまシくシ尤シ平日
も下シのシまシをシ斗シり用シひシて夜中シ出入シのシ前シも踏シみ越シく
用シを是シ尺シぐシ平日シとも上下シのシまシをシ用シゆるシ時シも

盗賊トウダクも入シる半シ叶シもシ大風シ竜巻シ甚シも至シて咎シふ
く家シを巻シ續シきシの恐シるシぐシは是シ等シの豫防シ法シ
平生シ能シく熟思シふシ

○大津浪シのシ名シも場シ小シも大船シ大材シ本シ等シ漂シ小シ来
て咎シふの家藏シも推倒シきシ事シも故シ小津浪シの可シる
濱里シも家作シの建方シ別シく堅牢シ小造シるシ屋シ一且津
浪シの来シるシべき方角シ小於シく柳シを一シ尺宛シの留シ小植シ付シ毎
年シ悉シく枝シを切捨シく二丈餘シの言シりシて二尺廻シりシふシ

ある時と大本漂盪の患を脱するに或る追年生長
タヨコオス
して三尺廻り以上ともおまはバハ何ある大船流を東
るとも決して推倒さる事有りさうさうは諸木の中生長
の早さの神小まきるのや宜く是を極くを大
害を避くべし

附録終

附火策圖解跋

夫西洋之於製器日盛年
精至竭奇巧然亦我長於
彼彼短於我者有焉粗於
前而精於後者有焉物皆
然矣彼嘗製冰鏡皮以稱
鎮火要器巧則巧也雖然

未足以防暴風猛火若夫
不可防則國家之疲弊殆
莫大焉矣家々雖財貨堆
積如山海一時一刻悉為
烏有豈可不悲乎哉我東
壑翁憂之既已久且其為
人敦厚誠實長于精思殊

勤經濟學頃者獲一書來
示于余曰此吾多年所凝
巧夫防火之一術也題曰
防火策圖解今將公于世
以免諸人災艱請子附一
跋余取閱之實古今未嘗
之說其製尤不繁重以天

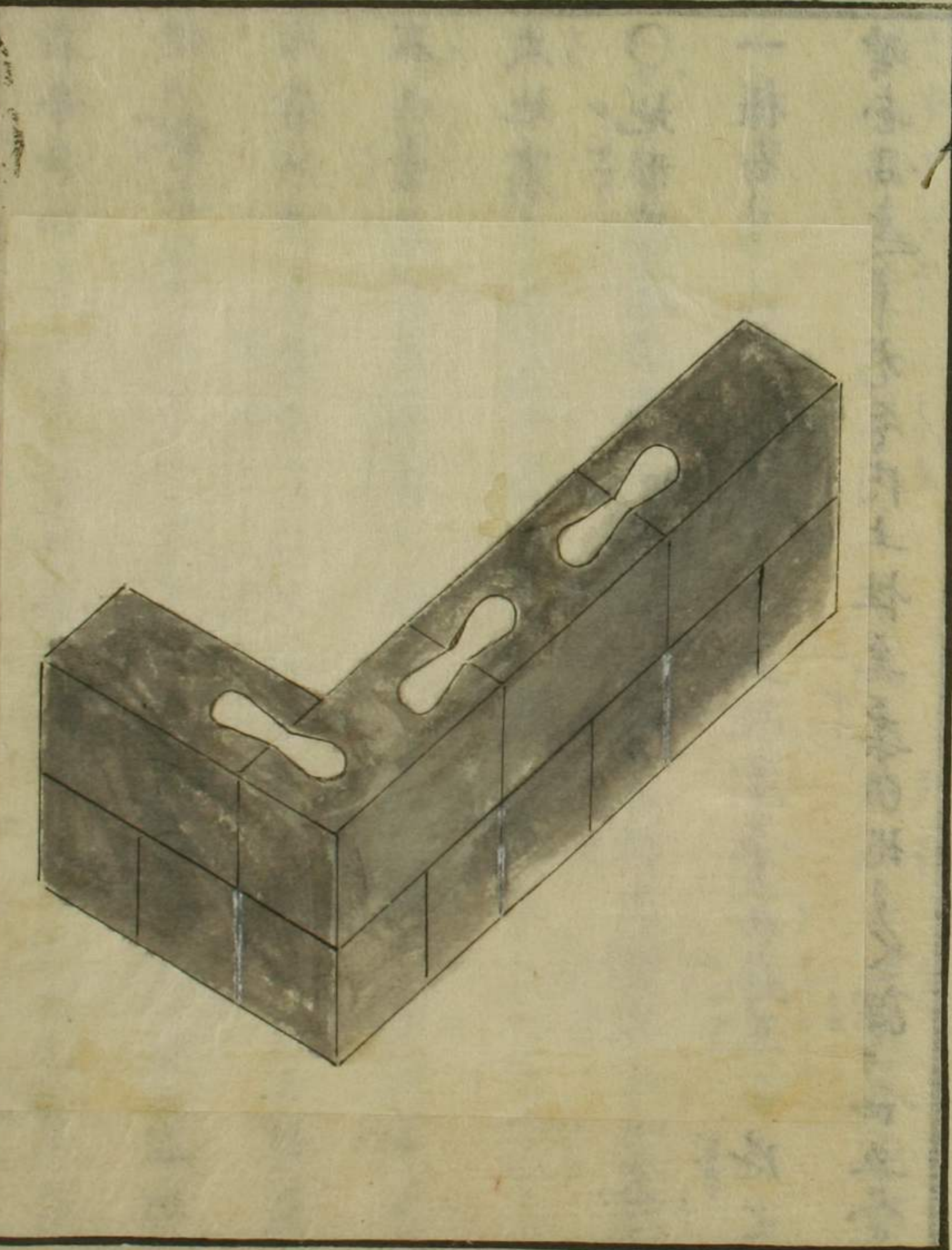
下，癩物為喫緊器，雖暴風
猛火，非惟防一家之火，足
以防天下之火，其效之火
可稱，而量哉，使此書傳播
於天下，則失火之患頓然
止，國家之富自能生，此皆
翁之賜也。然則我長於彼
者，乃以製器示族，次累出
日盛年，精豈其邪，因綴
敬辭以贈。

古稀於小森之和拓案識

阿久利神社

○土臺の石は角三重五重小組揚々々々の去卯年の大地底小悉く崩れたるを見たる且石地蔵石燈籠石垣等悉く崩れ倒れたるを以て勅考するに土臺の石も餘り高きふるると地震の爲るに宜く々々差三重以上小々々んと欲するを悉く礎を用ゆべしを法友等を以て了知すべし

○第九号



方丈集圖解

五

